●モノグラフ

小学生ナウ

Vol. 14-5

おばけとジンクス

目　次

影の場を持てない成長のスタイル……深谷昌志…… 2

〔調査レポート〕おばけとジンクス 7

要　約…… 8

はじめに…… 12

1．子どもたちは不思議な世界の住人…… 13

●「花子さん」が出る …… 13

●非現実的なものたちは好きですか？ …… 19

●不思議な体験をしたこと …… 24

●不思議な力の存在を試してみたこと …… 25

2．お守りや占いを信じるか …… 26

●プロミスリングをつけたことは？…… 26

●「占い欄」はお好き？…… 29

●お守りを持っていますか？…… 31

3．生活の中の祈りとジンクス …… 34

●神仏を信じますか？…… 38

●祈りを考える…… 41

●お墓参り…… 46

●生や死との出会い…… 47

4．まとめ …… 48

〔対談〕児童文学と子どもの空想力……西本鶏介 vs 深谷昌志 51

・文献紹介『新訂 児童文学創作講座１』 …… 60

資料１　調査票見本 …… 65

資料２　学年・性別集計表 …… 74

＊おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。

影の場を持てない成長のスタイル

静岡大学教授
深谷昌志

マンガと伝記との距離

子どもたちの間で、「花子さん」に象徴されるような学校怪談が流行している。それほど信じているのではないのであろうが、これだけ科学の発達した現代におばけ話が広まるというのは興味深い。

何年か前に、大学のゼミで、テレビの功罪を話し合っていたときのことだ。弊害は次々とあがってくるのに、テレビのもたらす効用が見つからず、話がとだえがちになったとき、女子学生のひとりから「中学の頃、バレー部に入っていたけれど、あれは『サインはV』の影響かしらね」という発言があった。それを受けて、別の学生から「『巨人の星』の星飛雄馬にあこがれたんだ」「『サインはV』より『アタックNo.1』の影響を受けた」「『忍者武芸帳』を見ているうちに、歴史に興味を持つようになった」などの発言が続いた。

彼らはなにげなく話していたけれど、話を聞きながら衝撃を覚えた。なぜなら、男の子なら、シュバイツァーや野口英世、女の子はキューリー夫人やナイチンゲールなどの伝記を読みながら、将来の生き方やなりたい人を考える。そうしたかつての成長のスタイルに代わって、テレビやマンガの影響を受けた世代が登場したからである。

考えてみれば、そうした事実に驚く方がおかしいのかもしれない。現代の子どもたちは、テレビを子守歌代わりに育ってきた。当然のことながら、マンガ雑誌で覚えたヒーローが毎週決まった時間にブラウン管に登場して大活躍するのを見てきている。そうだとすれば、ブラウン管のヒーローに未来の自分を見いだそうとする子どもがいても何の不思議もない。実際に、学生たちの何人かは子どもの頃、古代進（『宇宙戦艦ヤマト』）の生き方に影響を受けて、宇宙パイロットを目指した。あるいは、アムロ・レイ（『機動戦士・ガンダム』）にあこがれて、力強く生きようと思ったと語っていた。

ここで問題となるのはテレビのアニメ『宇宙戦艦ヤマト』と伝記『シュバイツァー』との間で、子どもの人間形成に与える影響に差がみられるかどうかであろう。残念ながら、強烈な印象という意味では本よりもテレビの方が数倍の影響力を持とう。顔色や表情、声の質などの具体的な姿を伴って、子どもたちに迫ってくるからである。

それにひきかえ伝記を読むのは、テレビと比べると、手間暇のかかる仕事になる。活字は具体的なイメージを伝えてくれないから、文字を手がかりとしながら、頭の中にキューリー夫人像を描かねばならない。それだけに文字を翻訳して、イメージの中に凝集させる読解力が必要となる。しかし、そうした過程を踏めば、自分なりの、そして自分だけのキューリー夫人像を持てるので、そのイメージは心の奥底に定着することになる。

パーソナルとインパーソナル

考えてみると、こうしたマンガと伝記との対比は、将来の生き方に限らず、子どもたちの価値観の形成そのものについても指摘できよう。

放課後の子どもたちの行動について、大規模な調査を行ったことがある。何日間かにわたって、帰宅後の行動半径を克明に追いかけた。その結果、子どもたちの交遊関係が、①同じクラスの、②同性の、③歩いて5分くらいに家がある、④塾通いなどのスケジュールの一致した、⑤気の合う仲間に限られている事実が明らかになった。具体的な数値をあげるなら、①に②の条件が加わると、つきあえる相手は約20人となり、③で7～8人、さらに④の条件を重ねると、3～4人、そして⑤で1～2人になってしまう。

事実、ほとんどの子どもたちは放課後、友と接触することなく、テレビを友とした生活を送っていた。

公園に行っても、遊び相手の姿が見えない。親しい友は塾通いのために不在。その友が暇になる頃、今度は自分がけいこごとへ行く番になる。そうした毎日が続くから、友を求めようという気持ちが薄れてくる。そのため、学校の昼休みにクラスメートとドッジボールをするときが、友とふれあう唯一の機会という子どもが少なくない。

たいくつだから、家に戻ってテレビのスイッチをひねる。再放映の『水戸黄門』や『大岡越前』が無聊を慰めてくれるし、夜ともなれば、テレビを見るか、テレビゲームをするか、マンガ雑誌をめくったりして時を過ごす。

友とのふれあいを欠く子どもたちが、日本はおろか、世界の情報に接している。パーソナルな関係の希薄さとインパーソナルな世界の拡大との谷間に暮らしているのが現代の子どもであろう。

子どもをとりまく人間環境についての全国調査を試みた。その中で同じ学校の友だち、よく行く文房具屋さん、3軒先の家の人などを具体的に示して、「仮に、あなたが足を折って入院したとしたら、その人たちはあなたのことを心配すると思いますか」の形で、心の通い合いの程度を尋ねてみた。

コンピュータから打ち出された結果によると、地域により多少のちらばりは認められるものの、子どもたちが心を通い合う範囲は、①両親、②きょうだい、③親類、④クラスの仲のよい友だち、⑤担任の先生、⑥となりの家の人に限られていた。人間関係の密度が濃い都市の下町や山村部だと、上記の他に、⑦3軒先の家の人、⑧校長先生、⑨同じクラスの人、⑩よく行く文房具屋さん、⑪家のまわりにいる友だちなどが、子どもたちのふれあう相手として登場してくるが、そうした事例は例外に近い。

したがって、子どもたちにとっての「身内」は家族と学級に限定され、家のまわりにいる人たちや同じ学校でもクラスの違う子は「他人」となる。

このように、現代の子どもたちはマルチメディアにとりかこまれているものの、パーソナルな人間関係の縮小化が進んでいる。

俗の世界と聖の世界

かつての子どもの人間形成を考えるとき、遊び友だちが大きな意味を持っていたのではと思うことが多い。

具体例をあげて考えてみよう。友だちとメンコやビー玉をする。時には、負けてばかりいる場合もある。しかし負けたからといって泣いていれば相手にしてもらえないが、そうかといってインチキをすると、当分の間、仲間外れにされてしまう。そうした事情は、敗者だけでなく、勝者についてもあてはまる。勝者にも、勝ち逃げはだめ、敗者にいたわりの気持ちを忘れずになどの行動が望まれるからである。

特に、子どもたちの遊びに、おとなが干渉することは少なかったので、子どもは自分たちで仲間内でのもめごとを処理せねばならなかった。助けを求めても、親はむろん、教師もかけつけてはくれない。そうした状況の中から作られていったのが、弱い者いじめをするな。けんかをするときに、飛び道具を使うのはひきょうなふるまいになる。どうしても決着のつかないときは、じゃんけんでかたをつけるなどのルールであった。

もちろん、そうはいっても、かつての遊び仲間を美化しすぎるのは危険であろう。メンコやビー玉は賭けごとの一種だし、ちゃんばらごっこにしたところで、乱暴な言葉や粗暴なふるまいを覚えがちな遊びだった。その他、とんぼの尾を切ってむぎわらを差し込む。せみの羽をちぎって飛ばないようにして歩かせるなど、冷静になって考えてみると、遊びの中には、悪や残忍さを伴うものが少なくなかった。換言するなら、そうした悪の香りに誘われて、子どもたちは仲間とともに遊んだのであろう。

つまり、パーソナルなふれあいの場である遊び仲間で子どもたちは自己主張の仕方や思いやりなど、友とのつきあい方を覚えた反面、そうした場を通して、悪の魅力にひかれて逸脱行為へと走る可能性をはらんでいた。

遊び仲間がいわば「俗」的な性格を持つのと対照的に、学校は望ましさを伝える「聖」の社会であった。例えは古いが、「蛍の光、窓の雪」あるいは「手本は二宮金次郎」は、学校のそうした聖的な性格を端的に示している。しかし、かつての修身がそうであったように、学校の中での望ましさは、具体的な行動を欠いた徳目の伝達であっただけに、たてまえの受容、あるいは望ましさを知識として獲得することに終わりがちであった。具体例をあげるなら、メンコにひかれる子どもたちの気持ちはわかる。しかし賭けごとに違いないのであるから、メンコを禁止する。そうした聖の精神を貫く世界が学校らしさだったとも考えられる。

つまり、かつての子どもたちは、遊び仲間を通して実世界を知ると同時に、学校の中で望ましさを学んだのであり、両者は2つの輪のように相補いあって、子どもたちの人間形成に役立っていたのであろう。そして、学校を欠く場合、望ましさに接しないから、逸脱行為へ走りやすく、そうかといって、友とのふれあいを持たないと知識だけを受容し、行動する力に乏しくなる。

人間関係の希薄さ

こうした図式で、子どもたちの成長をとらえてみると、子どもの周辺に、凝似的な学校が増加しているのが目につく。学習塾やけいこごとなどの第二の学校に加えて、家庭も親たちの目が行き届くので、学校的な色彩を強めている。さらにいえば、冒頭でふれたテレビやマンガもおとなが作り、情報を伝達するという意味で、広い意味での学校に属そう。

したがって、子どもをめぐる状況は、すでに紹介したインパーソナルなマスメディアの充満とパーソナルな関係の希薄さであると同時に、聖的な学校的機関の肥大化と俗的で遊びの要素を持った世界の縮小の形で要約できよう。

したがって、現在の子どもたちがさまざまな生き方を知識として知っているという意味では、昔の子の比ではない。かつての子どもの世界が、家や友だち、近隣の社会などの閉鎖的なプライマリー・グループに限られていたのに対し、現代の子どもは『大草原の小さな家』を通して、開拓者時代のアメリカを、そして『スター・トレック』の中で未来の生活を……というように、地域や時代を超えてさまざまな生活を知って育ってくる。

しかし改めてふれるまでもなく、知識の拡大は必ずしも人間性を豊かにするとは限らない。むしろ実際には、知識の受容に慣れすぎ、現実感覚を持たない子が育ちやすい。知識として、友情とはかくあるべきだとは理解している。しかし、現実の友を持っていないのであるから、理解は理解のままにとどまり、現実吟味をする機会がない。そうしたことが、他人の行動を批判はするが、自分の行動と言っていることとの不一致を招きやすい。さらに、言われた通りのことはするが、自分から何かをしようとしない自発性のなさも生まれてくる。

そうした人間関係の希薄な成長のスタイルの中で、子どもたちがわずかに人間性を示すのが怪談話なのであろうか。

人間性を育てるには

子どもたちの知識太りを減量し、人間性を育てるのにどうした方法が考えられるか。何よりもまず、人間的な絆を復活させることが必要であろう。特におとなの目が届き、しつけの管理化が進んでいるのが要因なのであるから、子どもたちが仲間とともに過ごせる場を作り出すことが重要である。そうした意味では、残念ながら、学校に期待できる部分は少ない。なぜなら、すでにふれたように、子どもにおとなの価値観を伝達する場が学校だからである。

しかし仮に、地域の中に子どもたちの遊び仲間集団が健在ならば、学校は本来の聖的な仕事に専念することができよう。そう考えると、学校としても放課後の子どもの暮らしに目を向ける必要が生まれる。子どもたちが集まり、遊びを通してふれあいを深めていく。そうした生活の積み重ねが、子どもたちの人間性を作る基盤になるからである。

そうはいっても、学校も、学校の中で子どもの人間性を育てる努力が必要となる。そのためにいくつかの方法が考えられるが、とりあえず、授業と授業以外の時間とを機能的に分離したい。そして、前者を教師指導型、後者を子ども主導型の時間とする。その場合、昼休みや２、３時限の間のロング・タイムの休み時間、そして給食の時間が子どもがふれあう機会となろう。それと同時に、中学校ではクラブ活動などの充実を図りたい気持ちがする。

しかし授業の中でも、子どもの主体性を取り戻させる作業が必要となろう。特に、自分で考えるという過程を捨象して、知識を受容する態度が目につくので、考える力を伸ばさねばならない。しかし、いずれにせよ、子どもたちのまわりに、もう少し非合理で影の部分のある環境があってもよいのではと思う。

〔調査レポート〕

おばけとジンクス

東京学芸大学教授
深谷和子

文教大学女子短期大学部助教授
石川洋子

日本心理センター研究委員
山根はるみ

『モノグラフ・小学生ナウ』Vol.14－5

調査レポート

おばけとジンクス

要　約

●調査概要

1．**調査主題**　おばけとジンクス

2．**調査視点**　科学万能時代に生を受けた今の子どもたちは、おばけやジンクスをはじめ、占いや超自然現象などの「不思議なこと」をどのように受けとめているのか。また、子どもたちはそれらの世界とどのようにかかわっているのかを明らかにしようとした。

3．**調査項目**　お守りや占い・ジンクスを信じるか、超能力・催眠術・ＵＦＯなどの番組が好きか、神仏に祈るか、生や死との出会い、怪談「花子さん」について、など。

4．**調査時期**　1994年６月～７月

5．**調査対象**　東京・千葉・岐阜の公立小学校４・５・６年生

6．**調査方法**　学校通しによる質問紙調査

7．**サンプル数**

（人）

	4年	5年	6年	計
男子	295	245	269	809
女子	310	218	261	789
計	605	463	530	1,598

1．昔から、こわいものや不思議なことが好きな子どもたちの中で、今おばけやジンクス、占いやお守り、超自然現象などはどう受けとめられ、それらに子どもはどうかかわっているのだろう。

調査対象は、東京、千葉、岐阜の小学4、5、6年生1,598名で、調査時期は1994年６月から７月であった。

2．「花子さん」の話は全体の74％もが知っており（図１）、自分の学校に「花子さん」の出る場所があると言っている子は、４割にも達する（図２）。「花子さん」の出る場所はトイレが96％である（表１）。「花子さん」の話は「気のせいだろう」が４割強、「作り話だろう」が２割だが、「本当に見た人がいる」も３割強いる（図３）。

「花子さん」は多様な名を持つ、子どもの「想像上の友だち」かもしれない（表２）。

3．子どもは「超能力、催眠術、ＵＦＯ、霊視」などの番組を好み（図５～図８）、「心霊写真、たたり、生まれ変わり、テレパシー」などの存在も、ないとは思っていない（図９）し、また不思議な力を持つ人の存在も、とくにマスメディアで宣伝される人については、けっこう信じている（図10）。

4．「虫の知らせ、幽霊を見たこと、霊の声の録音、心霊写真、かなしばり」などはさすがに７～８割が体験がないと言うが、１割弱は何回もあると言っている（図11）。

5．プロミスリングの流行は今は去ったようだが、全体の８割がそれをつけたことがあると言っており、半信半疑ながら願いをかなえたくてという層と、流行でという層に分かれるようである（図13～図15）。

調査レポート

おばけとジンクス

要約

6．雑誌の占い欄を「毎月」、または「ときどき見る」子は約半分もいる。とくに女子が関心を持っている。しかし「とてもよく・わりと当たる」とする子は、およそ15%でしかない（図16、図17）。

7．交通安全などのお守りは、8割が現在持っているか、または過去に持っていた。「ぜったい、ききめがある」と思っている子は2割と少ないが、「もしかしたら、ききめがあるかもしれない」と思っている子は6割もいる（図18～図20）。またお守りは、自分で買った子は少なく、両親が8割買って与えている（表4）。

8．「茶柱、血液型、生命線」などのジンクスは、7割前後が否定していないが、ものによっては信じられている率が低いものもある（図22～図24）。

9．神仏が本当にいると思う子は、45%いる（図25、図26）。

10．子どもは何かと祈っている。家族の病気、テストのときが、いちばん祈りたくなるときらしい。また祈りで願いがかなったことも、半数があると言っている（図30～図33）。

11．仏壇のある家は4割と少ないが、お墓参りにはよく行っている（図36、図38）。

12．人の生と死には、半数くらいの子が、1度くらいは立ち会っている（図40）。

13．以上はほとんどの項目で、女子の数字が大きく、こうしたものへの関心は、明らかに女子に強い。またかなりの項目で学年が進むと、信じる割合が少しずつ減っていく。さらに幸せ感を聞くと、上記の傾向と同じに、女子に幸せ感が強いが、学年と共に減っていく（図42）。

不思議なものへの関心や信じる心が減っていく過程と、幸せ感が減っていく過程が一致するのは、子どもがおとなになる道筋であろうが、ある種の感慨がある。

はじめに

『学校の怪談』という本のシリーズがよく売れていて、発行部数は80万部を超えるという。そのうち、約15万部は、全巻セットで小学校の図書館に納められているとかで、子どもの怪談好きは時代を超えたものらしい。振り返ってみれば、昔から学校では、子どもの間でおばけの話が密かに語り伝えられていたことに、思いあたる人も多いだろう。

子どもがこわい話を好むのは、怪奇な世界への関心というより、もしかしたら、つい先頃まで魚のように羊水に浮いていて、人間界の住人でなかった彼らの記憶の底に残る「何か」のせいなのかもしれない。しかし、闇の底に端を発する恐怖の感情は、子どもを不安にさせるだけではなく、彼らの生の喜びの彫りを、より深くする作用を持つものかもしれないのである。

しかし最近の子どもたちは、生まれたときからテレビやコンピュータの持ち込む情報の中にあり、おぼろな影の作る世界をのぞきみる体験を大幅に減らされてしまっているかに思える。しかし他方で、霊魂や超常現象の存在を信じる10代、20代の比率が増えてきているという調査結果もある。

このレポートでは、そうした状況を踏まえながら、おばけやジンクスをはじめ、占いや超自然現象などの「不思議なこと」が、どの程度子どもに信じられており、子どもがそれらの世界とどうかかわっているかについて、明らかにしようとしている。

なお、調査対象は東京、千葉、岐阜の小学校７校の４、５、６年生1,598名で、1994年６月から７月に学校通しで調査が実施された。

1 子どもたちは不思議な世界の住人

●「花子さん」が出る)))

テレビ界では、最近「霊視」や一連のオカルト番組がもてはやされ、それに異論や警告を与える科学者なども登場して、にぎやかである。

科学時代の申し子である現代の子どもたちは、物心がついたときからテレビの幼児番組やアニメーションの世界に触れ、コンピュータが内蔵された人形やゲームのおもちゃと共に成長してきた。昔から子どもが好んで接触してきた、不思議な話、おばけ、占いやお守り、そしてジンクスや迷信との関係は、こうした科学万能の時代にあって、一体どうなっているのだろう。

子どもの世界では、ひと頃はやった「口裂け女」に変わって、ここ数年全国の小学校に広がっているのが「トイレの花子さん」のシリーズと聞く。まずはじめに、子どものいちばん身近にいるおばけ、「花子さん」からのぞいてみよう。

まず「花子さん」の話を知っている子は、**図1**が示すように全体の74%もおり、「花子さん」が出る場所も、**図2**に示したように41%が「自分の学校に出る場所がある」と答えている。しかも男子より女子が、6年生より4、5年生が関心を持っている。また**表1**によれば、「花子さん」が出るのはトイレが96%で、昔と違ってトイレが明るく清潔になった今も、その場所を引き継いでいる。

しかし子どもは本当に、トイレに「花子さ

図1　「花子さん」の怪談を知っているか

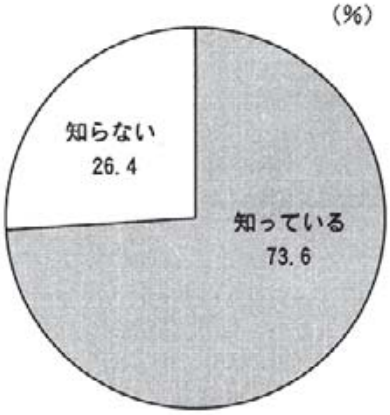
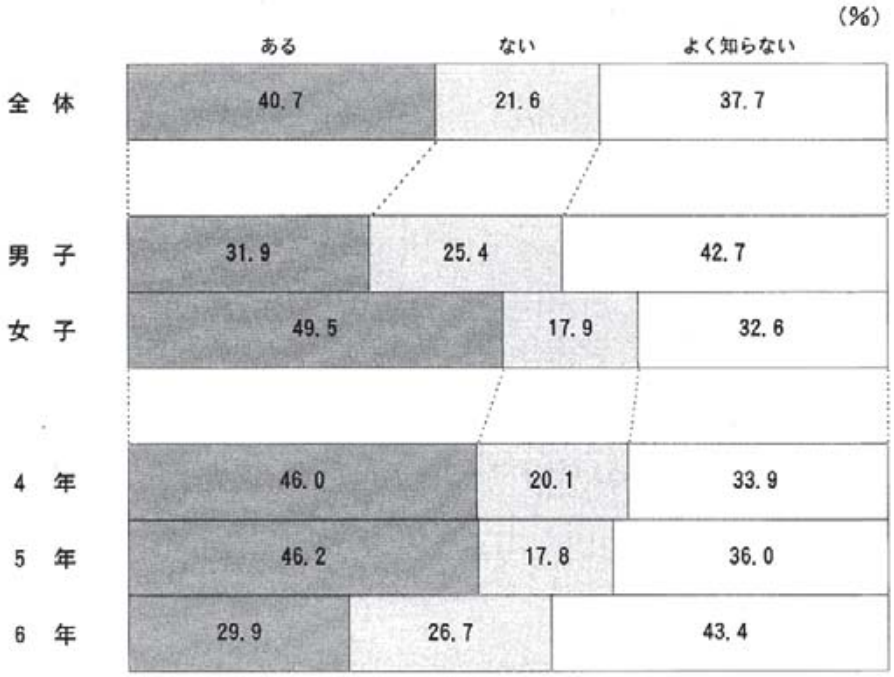


図2　学校に「花子さん」の出る場所があるか



ん」が出ると信じているのだろうか。しつこいようだが、さらに「花子さん」は本当に出るのかを尋ねたのが図3である。これも女子の方に確信する割合が高いが、全体では「本当に見た人がいる」は34%で、それほどの数字ではない。4割強が「気のせいだろう」、2割が「作り話だろう」と覚めた答えをしており、半分は面白がって噂をしているだけとも思われる。

表1　「花子さん」の出る場所

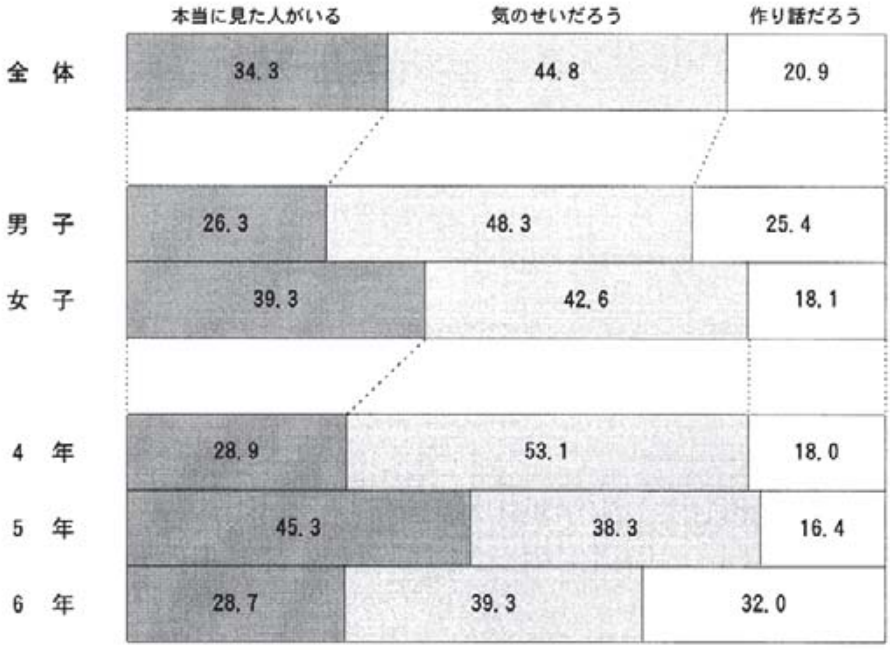
(%)

トイレ	階段	理科室	音楽室	プール	教室	校庭	その他
95.6	21.9	20.5	19.5	11.9	8.7	7.9	16.1

(複数回答)

図3　「花子さん」は本当に出るのか

(%)



ちなみに、「花子さん」以外のおばけの名前を尋ねたら、**表2**のようになった。「太郎さん」「次郎さん（くん）」「やみ子さん」が代表選手だが、ひと頃のスター「口裂け女」もいるし、昔ながらの「こっくりさん」のほかに、「ベートーベン」「二宮金次郎」、なぜか「3本足のリカちゃん」「花子さんのおじいさん」、果ては「ゲバゲバ」「星の王子さま」「モナリザ」「ロダン」「リカちゃん」など、おばけの名前とは思えない名前もまじっている。どうみても学校のおばけは、子どもたちの「想像上の友だち」という気がする。

そこで、子どもに「おばけ」の話が好きかどうかを尋ねてみると、**図4**が示すように、おばけの話が好きな子は、「とても・わりと」を合わせると64%にのぼり、また女子がやや好んでいる。しかし、数字は学年と共に減少し、「とても好き」に例をとれば、4年から6年にかけて、35%、33%、24%と、とくに6年生で大きく減っている。

『学校の怪談』シリーズを発行している出版社には、「花子さん」が幽霊になったいきさつや死因、家族構成などについて、子どもから詳しい情報が葉書で寄せられてくるという。おばけ話をリアリティーを持って受けとめることができるのは、いわば幼な心の柔らかさとみずみずしさの土壌のゆえかもしれない。

表2　おばけの名前

おばけの名前	個数	おばけの名前	個数
太郎さん	184	じろうくん	23
次郎さん	50	二宮金次郎	15
やみ子さん	47	さち子さん	13
こっくりさん	28	くちさけおんな	11
ベートーベン	27		

〈5～10個〉

- ウッキョキョ星人
- キューピッドさま
- シャカシャカ
- テケテケ
- 貴子さん
- のり子さん
- 星の王子さま
- みのるくん
- みち子さん
- ゆめこ
- がいこつ
- 3本足のリカちゃん
- 3時のばばあ
- デブリン
- つぐみちゃん
- 花子さんのおじいさん
- 花男くん
- むらさきばばあ
- ゆう子さん

（次ページへ）

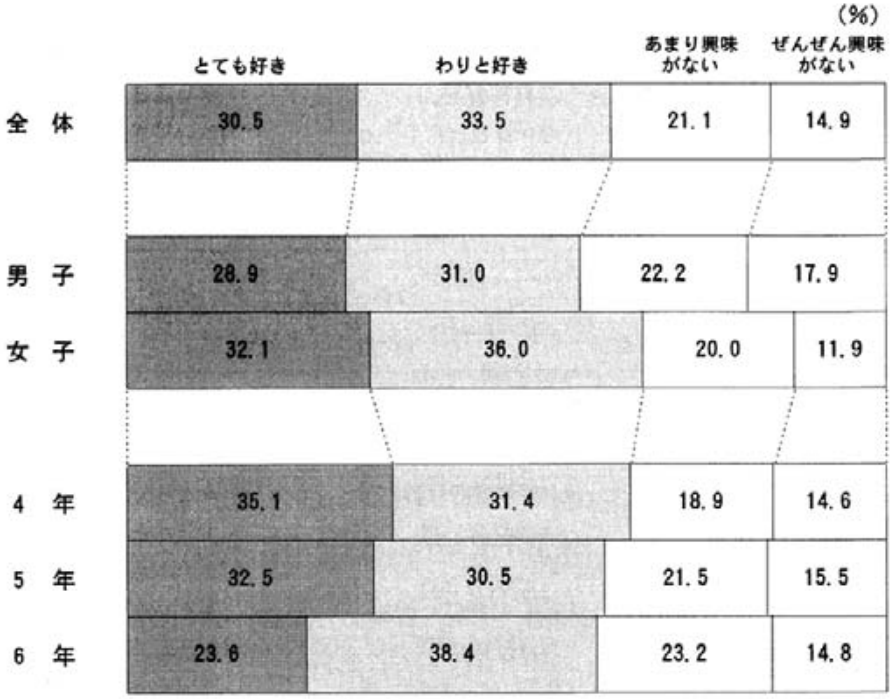
〈3～4個〉

・おきくさん	・よだぞう	・のぶおくん
・あけみちゃん	・ようこ	・ほうちょうをもつ女
・ごろうさん	・ロンドン	・森田くん
・３色ばばあ	・お岩さん	・よしこさん
・ネアンデルタール人	・あかりちゃん	・れい子さん
・ノッポさん	・じごくさん	
・マイケール	・たかしくん	

〈1～2個〉

・おきぬさん	・たまりちゃん	・花美
・おいでおいでのまつ	・なつこ	・ひかるちゃん
・ＡＢＣおばけ	・なぞのさかさ男	・みどりくん
・あずきあらい	・ばけねこ	・まどおとし
・お花	・ひろしくん	・まさみちゃん
・赤ふんどしの先生	・はなえさん	・モナリザ
・あかいちゃんちゃんこ	・ひろみさん	・まゆみさん
・きみ子さん	・本からとびだす耳なしほうー	・目玉おばけ
・うらしまさん	・エンゼルさん	・四次元ばばあ
・あき子	・ガキつき	・ＵＦＯ少女
・おおにゅうどう	・首かり　ぬまお	・ゆめ子さん
・うめこ	・かおるさん	・ロダン
・えんまだいまおう	・ゲバゲバ	・リカちゃん
・あかいマント	・せんそうじじい	・ぶよぶよちゃん
・おみよさん	・自転車のり子さん	・みつ子さん
・足だけのさわ田くん	・しのぐさん	・みゆきちゃん
・あおい人	・さっちゃん	・まさおくん
・うんちょちょ	・血のまくら	・みっちゃん
・がき	・たみこさん	・ミーちゃん
・黒いかげ	・ぬりかべ	・もも子さん
・げろはき	・生首としおくん	・よしこさん
・斉藤さん	・ピンクさん	・よみこさん
・さなえさん	・火の玉	・ゆきみさん
・さく子さん	・ひとみさん	・理科子さん
・竹さん	・走るバーさん	・ろくろくび

図4　おばけの話が好きか

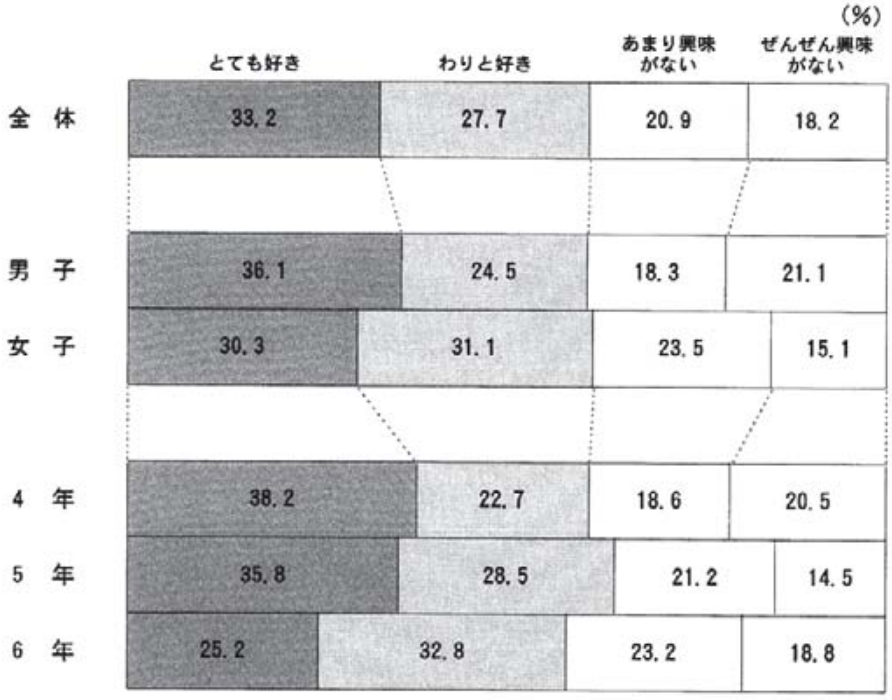


●非現実的なものたちは好きですか？)))

最近のテレビでは、霊視に代表されるおどろおどろしい番組を好んで放映している。そうした番組が好きかどうかを図5～図8に示した。中では「超能力」の番組が最も好まれ、「とても・わりと」好きな割合が6割を超える。以下、「催眠術」「ＵＦＯ」「霊視」の番組が僅差で並ぶ。

男子と女子を比べると、女子は催眠術（図

図5　「超能力」についての番組が好きか



6)、霊視（図８)がやや好きだが、ＵＦＯ（図７）は男子が好んでいる。男子の方がやや科学的なものが好きなようである。しかし、いずれも学年を追うにしたがって、こうした番組を好む子が減少する傾向は、共通である。

図６　「催眠術」の番組が好きか

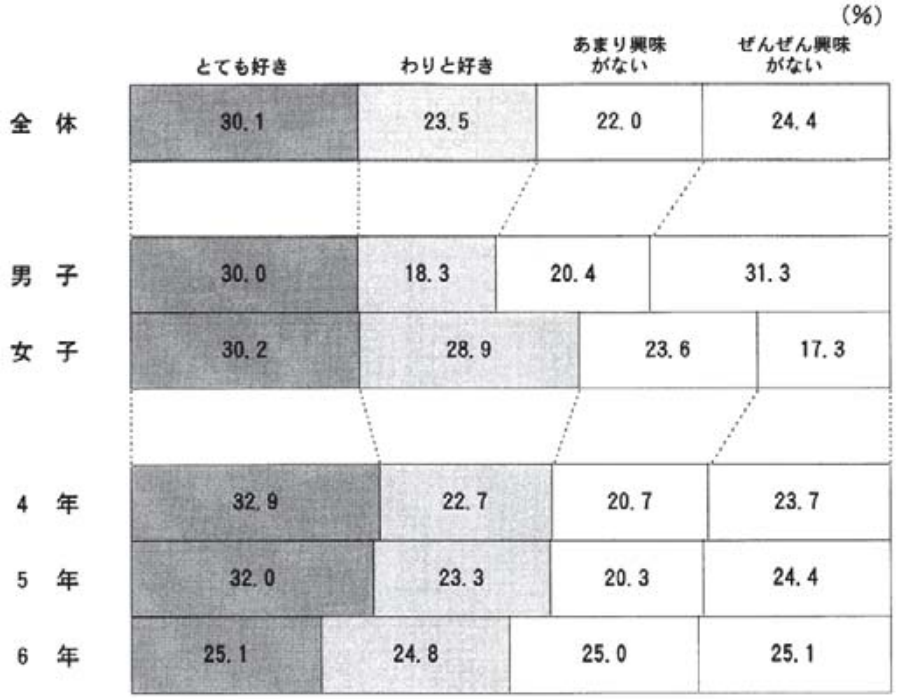


図7 「ＵＦＯ」の番組が好きか

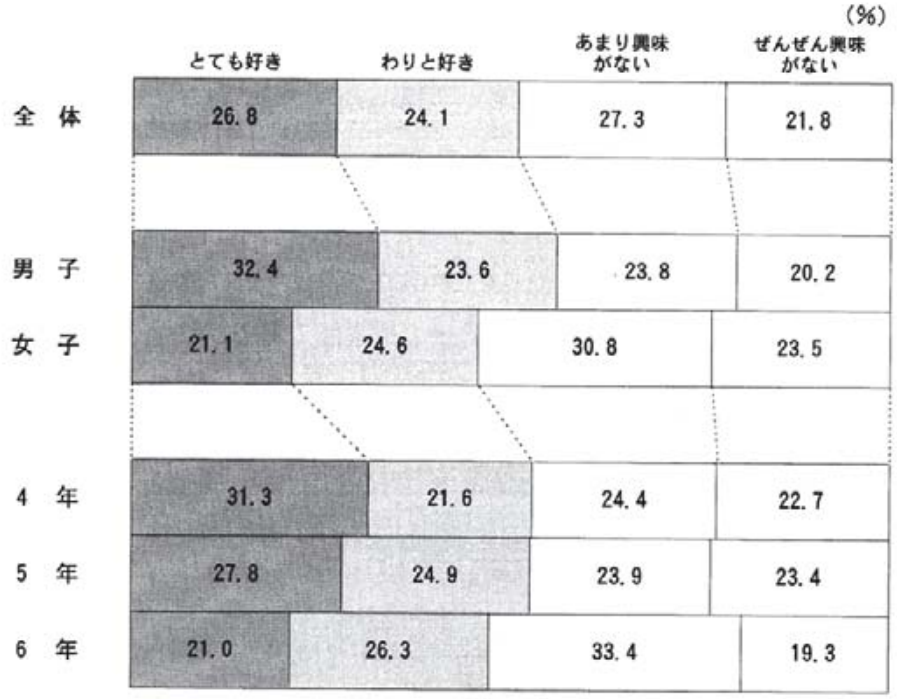
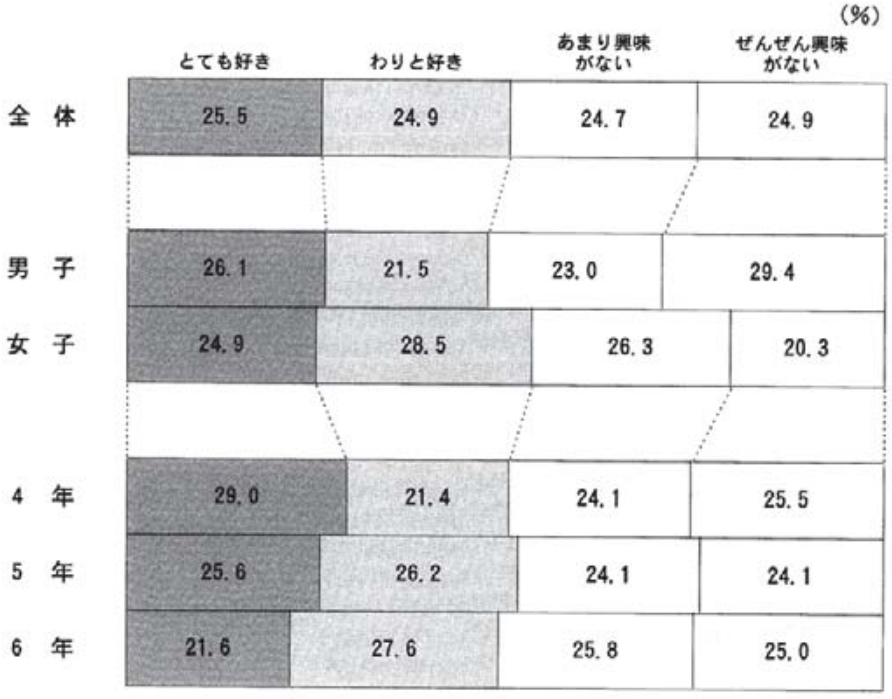


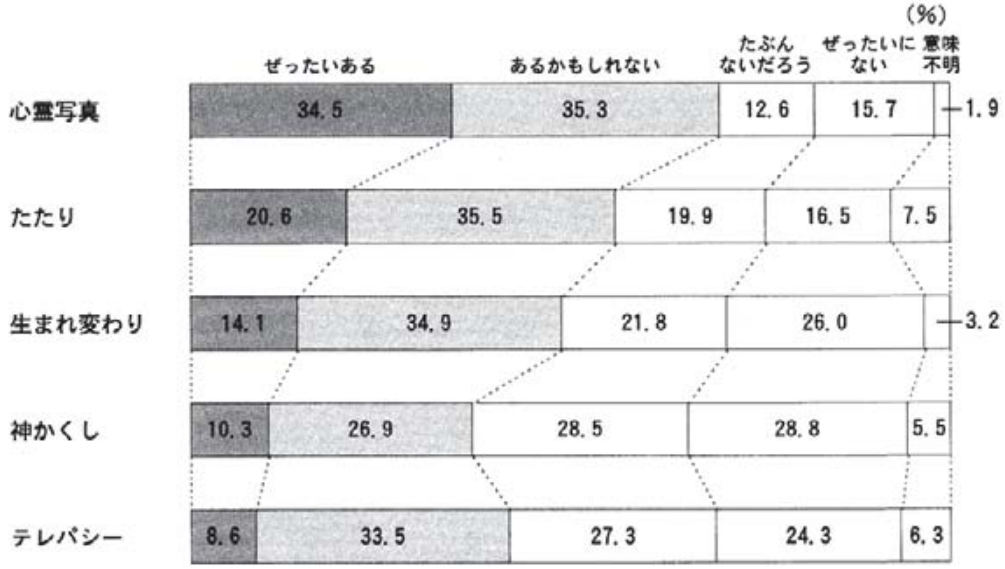
図8 「霊視」についての番組が好きか



次いで、もっと「おどろおどろしいもの」または不思議な力の存在を信じるかどうかを「心霊写真、たたり、生まれ変わり、テレパシー、神かくし、霊感の強い人、霊視のできる人、不思議な力で病気を治す人、妖精」について尋ねたのが図9、図10である。

図9をみると「ぜったいある・あるかもしれない」と思っている子は「心霊写真」の70%、「たたり」で56%もおり、やや数値が下がるが「生まれ変わり」でも49%いる。「神かくし」「テレパシー」は、さすがに「ぜったいある」は1割前後だが、とにかく「あるかもしれない」とする者は（「神かくし」以外は）どの項目も3割以上もおり、まずは半信

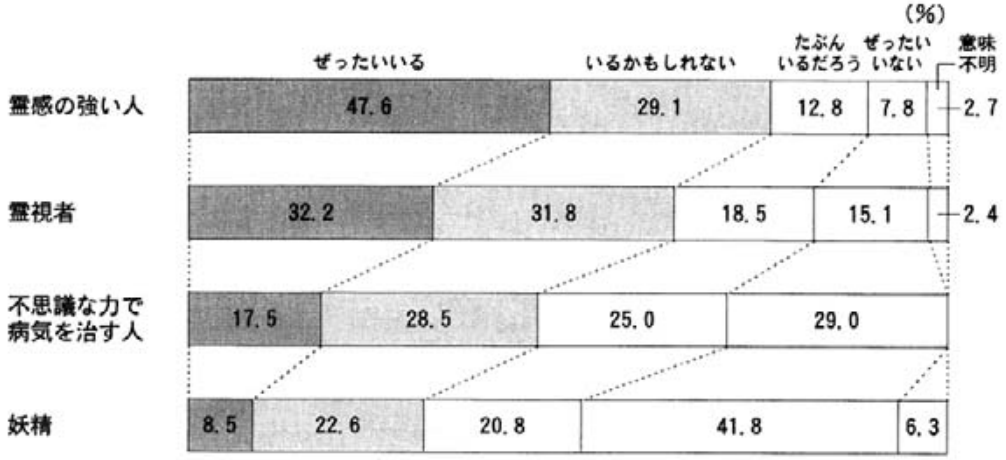
図9　「不思議なこと」は本当にあるか



半疑というところだろう。「ぜったいにない」と断言している子は2割から3割でしかないのが、それを表している。

図10も同様で、最近テレビに登場する「霊感の強い人」だが、「ぜったいいる」とする者は48%、「霊視者」も32%おり、「いるかもしれない」を合わせると77%、64%が肯定していることになる。それに対して「不思議な力で病気を治す人」「妖精」は、「ぜったいいない」と否定する子は3～4割を占める。テレビなどの伝達する情報の影響力の大きさが現れているといえよう。

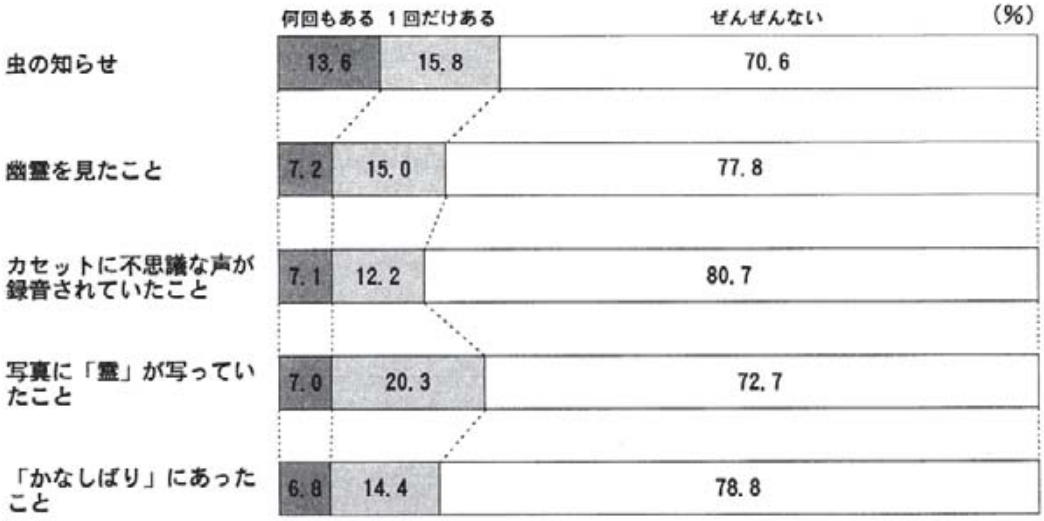
図10 「不思議なもの」は本当にいるか



●不思議な体験をしたこと)))

子どもはどのくらい、科学で説明できない体験をしたことがある（と思っている）かを示したのが図11である。「虫の知らせ、幽霊を見た、不思議な（霊の）声の録音を聞いた、写真に霊が写った、かなしばりにあった」のはさすがに２、３割でしかなく、７割以上が「ぜんぜんない」と答えている。しかし少数ではあるが、何回も「虫の知らせがあった」(14%)、「幽霊を見た」「不思議な声が録音されていたのを聞いた」「写真に霊が写った」「かなしばりにあった」とする者（７%）がいるのは、どう理解したらいいのだろう。

図11　次のようなことがあるか



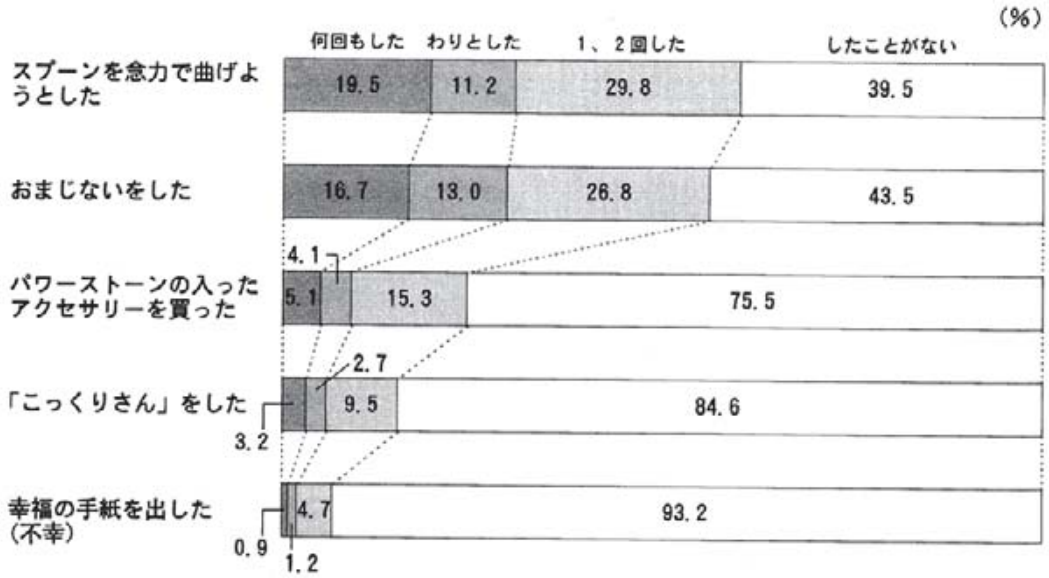
●不思議な力の存在を試してみたこと)))

今もしばしば、怪奇現象や超能力現象の存在が宣伝され、人々の間に流行している。「幸福の手紙」や「こっくりさん」は昔から繰り返し子どもたちの間で流行していたし、「おまじない」は流行というよりも、社会の持つ文化の一部かもしれない。「スプーン曲げ」はマスコミの力によって脚光を浴び、「パワーストーン」は現在、少女雑誌などのグッズ販売で、確実にあるシェアを持っている。

子どもは生来、のりやすく影響されやすい者たちである。そうした「不思議な力」を彼らはどのくらい信じ、また実際にも自分で試してみたかを尋ねてみた。**図12**によれば、「スプーン曲げ」は6割の子が1度以上試しているし、おまじないもそれに近い。しかしあとはごくわずかである。こうした力に関心は持っていても、行動までに至らないのは、どこか疑いの気持ちの方が大きいのだろう。

ただし性差があって、巻末の集計表によれば、「スプーン曲げ」を何度も熱心にしているのは男子に25%もいるが、女子では14%と大差である。「おまじない」や「こっくりさん」は、逆に女子がよくしている。

図12　次のようなことをしたことがあるか



2 お守りや占いを信じるか

●プロミスリングをつけたことは？)))

プロミスリングは、ミサンガとよばれる色とりどりの糸で編んだ腕輪である。もともと南米で宗教的な意味合いを持って使われており、プロサッカー選手がつけていたものが、Ｊリーグの選手に広がった。プロミスリングに願をかけてずっと腕につけておき、それが切れたときに願いがかなうとされて、まず中・高校生の間で大流行した。小学生たちも、この流行にのったのだろうか。

プロミスリングをつけたことがあるかを聞いてみると、図13が示すように、「今もつけている」子はわずかだが、「前につけていた」子は75%もいる。これもやや女子に多い。しかし子どもたちは、本当に願いがかなうと信じてそれを腕につけるのか、それともただの遊びなのか。図14（複数選択）によれば、「どうしても、かなえたい願いがあったから」つけた子は19%にすぎないが、「もしかしたら、願いがかなうかもしれないから」と考えていた子は46%いる。しかし「みんながしているから」（44%）、「友だちからもらっ

図13　プロミスリングをつけたことがあるか

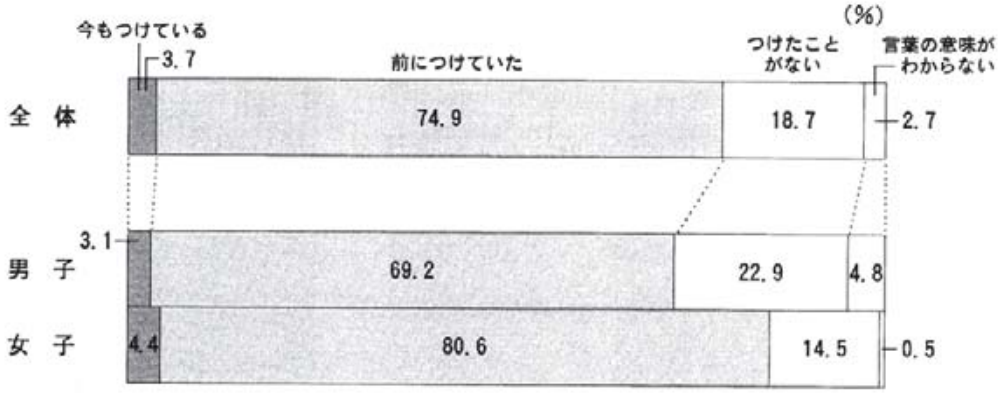
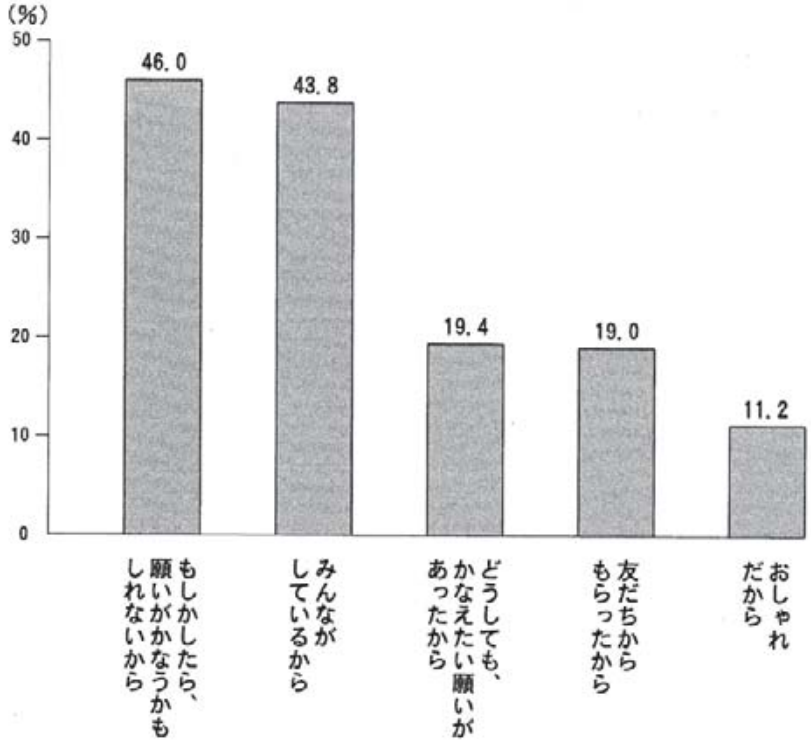


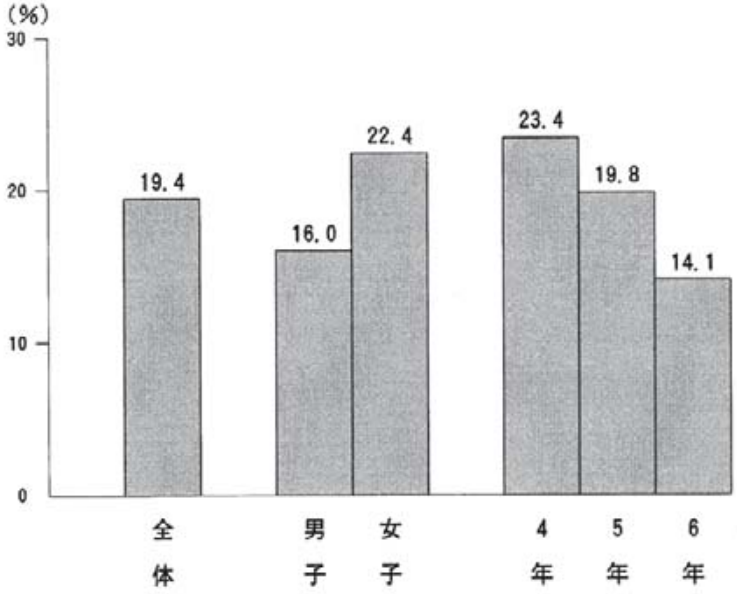
図14　なぜプロミスリングをつけているか
（複数選択）



たから」(19%)、「おしゃれだから」(11%)の数字をみてみると、必ずしも本気で信じているわけではなく、軽いノリと「ひょっとして」に支えられた遊び心からというべきか。

なお図15に示したように、そのききめを信じる子には女子が多く、また学年と共に信じる子が減っていく。

図15　どうしても、かなえたい願いがあったから

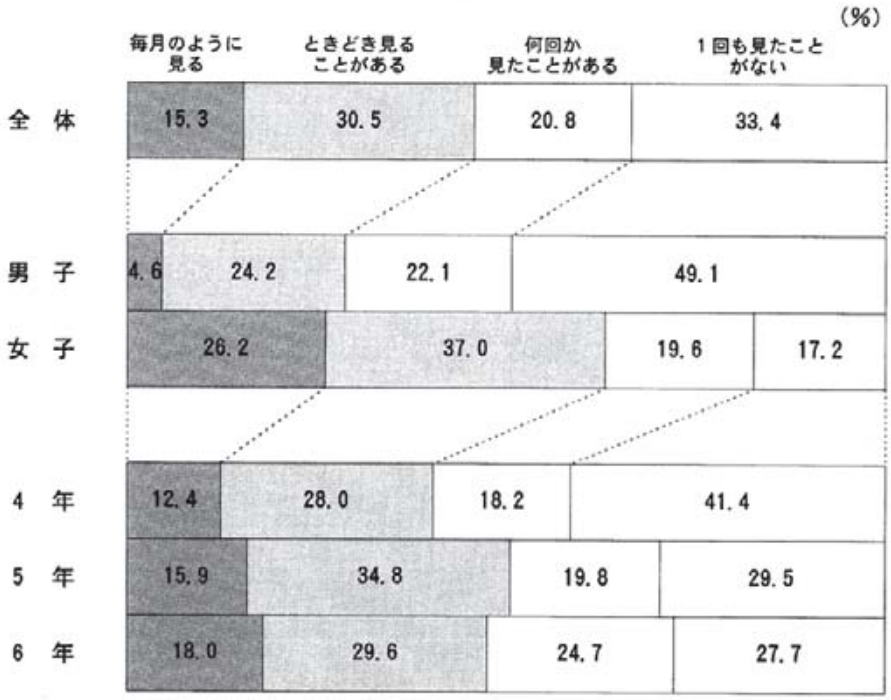


●「占い欄」はお好き？)))

女性誌では占いのページが大流行りで、占い専門誌も出てきている。星占いや運勢などの欄は、本当に信じられて読まれているのだろうか。それはともかく、占いへの関心を子どもたちに聞いてみた。

図16に示したように、雑誌などの占い欄を「毎月のように見る」子は15%もいる。「ときどき見る」子も31%で、半数近くは占いに関心を持っている。しかし男女別にみると、占いはやはり女子が好きで、「毎月のように見る」女子は26%もいるが、男子はわずか5%にすぎない。「毎月・ときどき見る」子を占いに関心のある層とすれば、女子には63%もいるが、男子は29%と女子の半分以下でしか

図16　雑誌などの「占い欄」を見るか

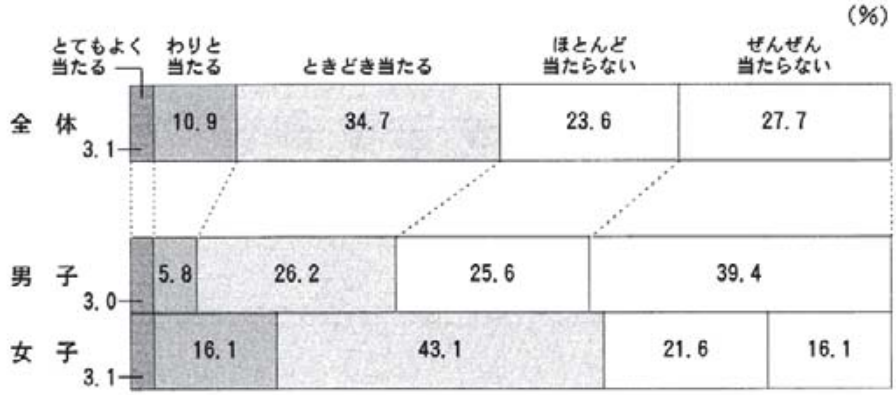


ない。

その占いが本当に当たると信じているかについては、図17によれば、当たるとする子と当たらないとする子は大まかに半々である。「とてもよく・わりと当たる」とする子は14%とわずかだが、「ときどき当たる」と考える子は35%いる。しかし「ぜんぜん当たらない」とする子も28%おり、「ほとんど当たらない」を合わせると5割を超す。

ここでも女子がやや占いの効力を信じている。例えば「ぜんぜん当たらない」と強く否定する子は男子では39%だが、女子では16%と男子の半分以下である。しかし巻末の集計表によれば、学年が上昇しても、占いの効果を信じない子は、思ったほど増加しない。

図17 「占い欄」は本当に当たると思うか

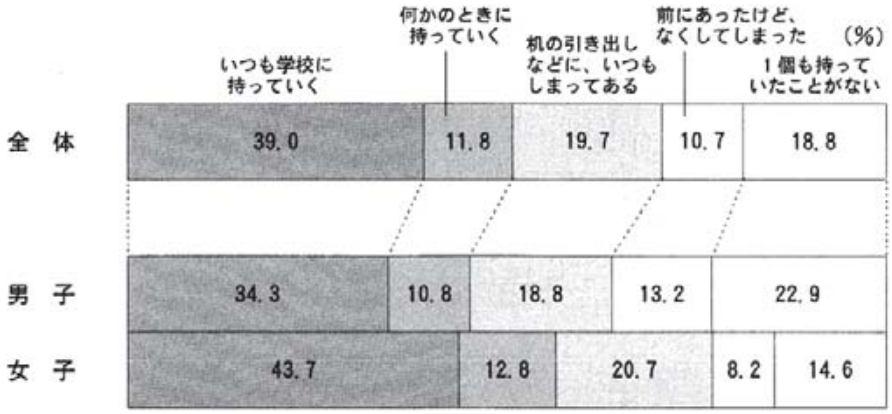


●お守りを持っていますか？)))

小学生がランドセルに、交通安全のお守りをぶら下げているのを目にする。子ども自身がそのききめを信じているのか、それともみんなの真似やファッションの１つなのか、それとも親たちの、子どもが交通事故にあわないようにという願いからなのだろうか。

図18をみると、お守りを持ったことのない子は２割しかいない。８割がいずれかの時期に、さまざまな形でお守りを手にしている。４割は現在もカバンなどにつけて、いつも学校に持っていく。いつもではないが、何かのときには持っていく子も１割いる。もしかしたら、毎日学校へ持っていく４割よりも、この１割の方が、お守りのききめを信じている層かもしれない。男子と女子では、ここでも女子がややお守りを持っている。

図18　交通安全などの「お守り」を持っているか



次に、そのお守りのききめを信じているのかどうかを**図19**、**図20**でみると、「ぜったいききめがある」とする子は23%もいる。「もしかしたら、ききめがあるかもしれない」も63%おり、合わせると86%と、大多数の子がお守りのききめを否定しない。「ぜったいにききめはない」と言い切る子はわずか5%にすぎない。当然のことながら「ぜったいききめがある」とする者は、学年を追って27%、24%、18%と、とくに6年生でかなり減っている。しかし「ぜったいに・たぶんききめはない」とする子は学年によってほとんど差がないから、強い肯定者が減るだけで、全体では半信半疑のままの推移といえそうだ。同じ問いをおとなたちにしてみたらどうなるだろうか。

次にお守りの個数をみると、**表3**に示すように、1個が41%、2個が29%で、持っている数は決して多くない。そのお守りをどうやって手に入れたのかを**表4**でみると、「自

図19 「お守り」はききめがあると思うか

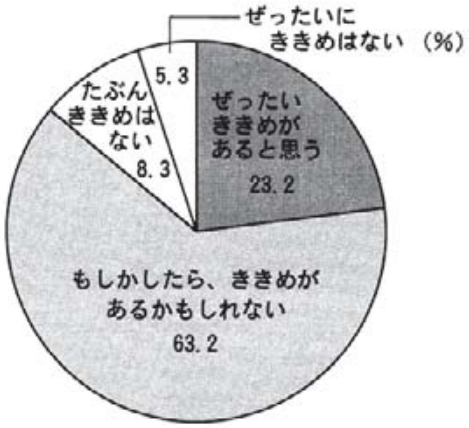
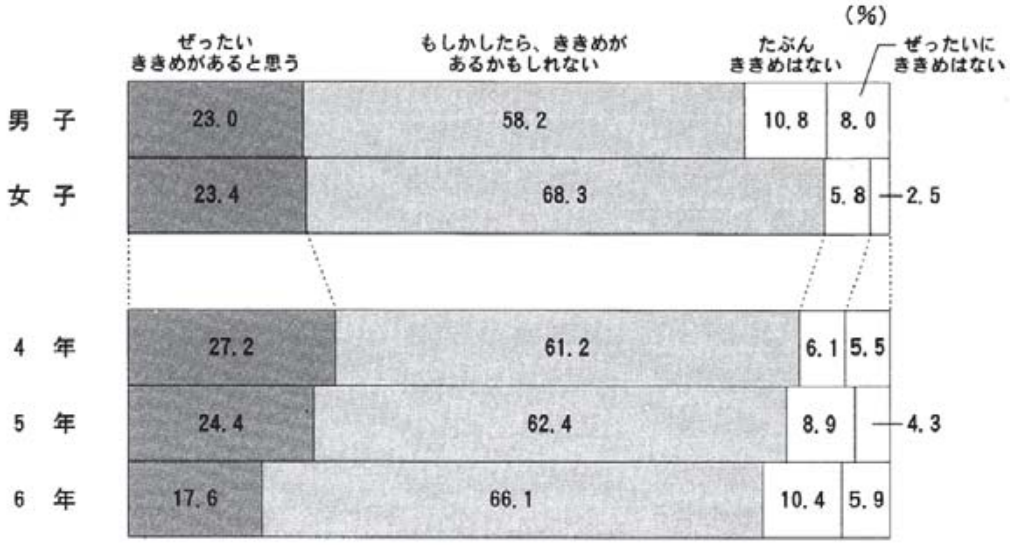


図20 「お守り」はききめがあると思うか × 性・学年



分で買った」子は少なく、8割が「お父さん・お母さんから」もらったという。お守りは親の厄除けの願いの現れであり、ききめについて子どもは大して本気にしていないが、といって否定もせずに持っている、といったところだろうか。

したがって、古いお守りを捨ててしまう子は、図21によれば6％とわずかで、ほとんどの子が「大切に」または「なんとなく」とっておく。

表3　「お守り」を何個持っているか

（%）

	1個	2個	3個	4個	5個以上
全　体	(41.3)	29.3	17.0	5.2	7.2
男　子	(45.9)	26.7	16.2	3.4	7.8
女　子	(37.4)	31.6	17.7	6.7	6.6

◯は最大値

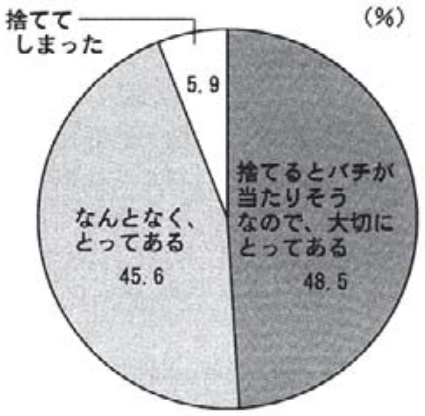
表4　「お守り」をどうして手に入れたか

（%）

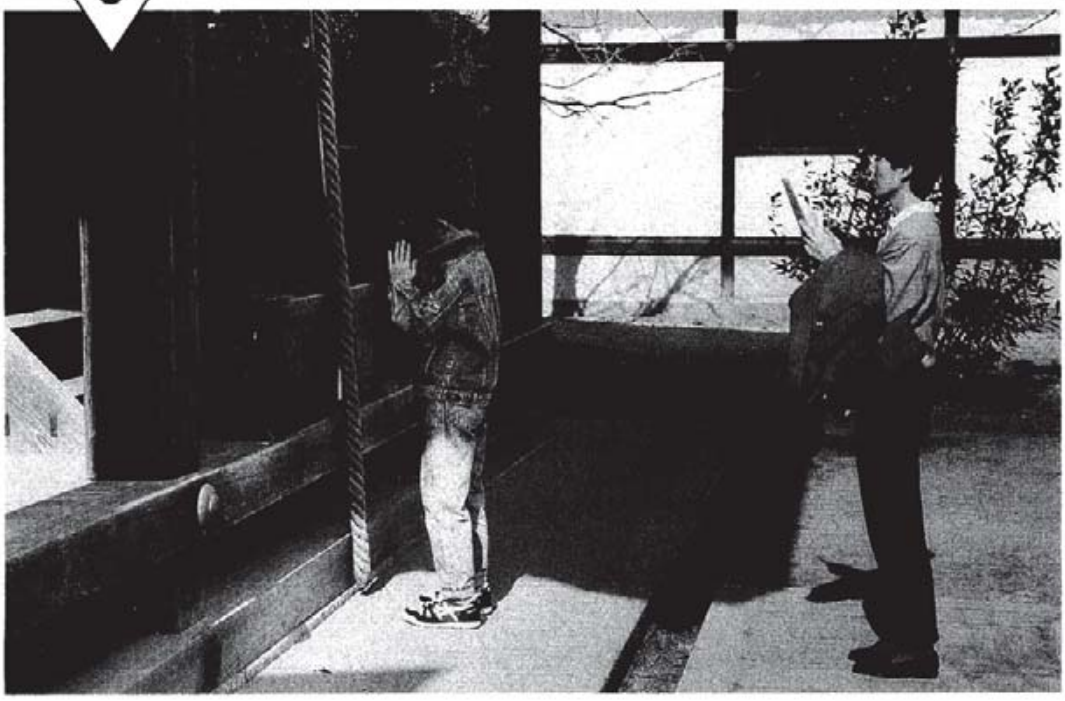
自分で買った	両親から	祖父母から	兄弟から	友だちから
12.5	(80.1)	47.6	6.1	7.6

（複数回答）
◯は最大値

図21　古い「お守り」をどうしているか



3 生活の中の祈りとジンクス



ジンクスはその昔、生活の中にたくさんの危険や予測のつかないアクシデントが満ちあふれていた時代に、人々が自分の身を守る方法として生み出してきたものだった。科学の進歩はこうした不安からわれわれをかなり解放したが、しかし人生では、未だにある割合で「災難」がわれわれを待ち伏せている。それを避けるのには、ジンクスやおまじないや祈りしかないともいえそうである。子どもも、おそらくそうしたジンクス文化を、知らず知らずのうちに親たちから受け継いでいるに違いない。

まず、ジンクスを信じるかについてみたのが**図22**である。「茶柱が立つと、いいことがある」というジンクスの発生は、庶民がお茶を常用するようになってのことではあろうが、おそらく50年もそれ以上も昔からのもので、ずいぶん古い命を持っている。しかし未だに「ぜったい信じる」が36%もおり、「少し」をいれると実に7割を超している。おそらく日々の暮らしの中で親たちが、その都度、「茶柱が立ったから、いいことがあるよ」と言っているに違いない。親の世代にしてもそれを頭から信じているわけではなく、「いいことがあったらいい」という気持ちからの言葉だろうが、子どもの方でそれを受けとめているのであろう。

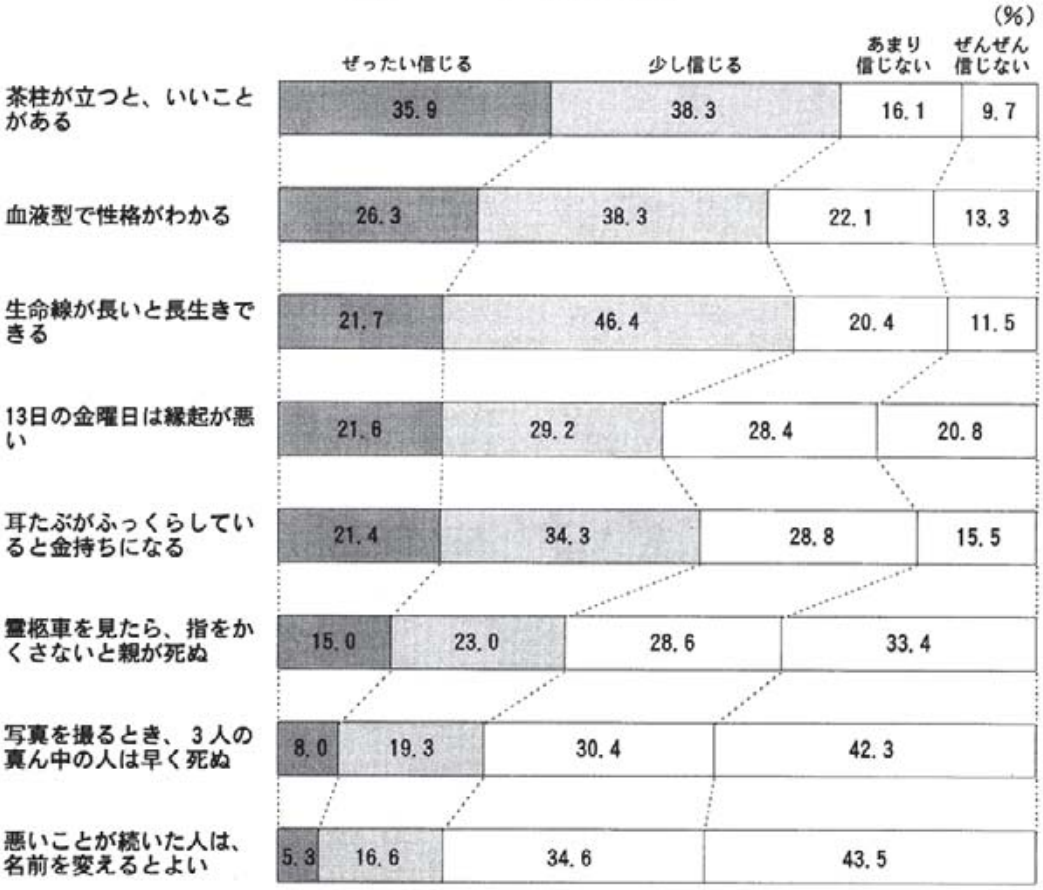
また最近、日本人の不思議な「血液型」信仰を、社会（心理）学的に解析する論文や著書が次々と出されているが、子どもにもその文化は受け継がれているようで、「ぜったい・少し」を合わせると6割を超える子が血液型と性格の関係を信じている。「生命線」の長さと寿命の関係も、ほぼ同じくらいの数字である。さらに「13日の金曜日」という西洋のジンクスも、「耳たぶがふっくらしていると金持ちになる」という東洋的なジンクスも、「少し」を含めると5割を超える子どもが信じている。

それに比べると「信じない」とする子が多

くなるのは、図の下の３項目である。「霊柩車を見たら、指をかくさないと親が早く死ぬ」も古い命を持ったジンクスで、少なくとも50年前にすでに子ども世界に存在した。今ではこれを否定する子は「あまり信じない」を含めると６割強になるが、見方によると「ぜんぜん信じない」と強く言い切る子は33％しかいないのだから、霊柩車のジンクスも相当に命の長いものといえそうだ。

「３人で写真を撮ると真ん中の人が早死にする」ので、３人を避けるとか、やむを得ないときは人形を抱えて４人にするというジンクスも、同様である。「ぜんぜん信じない」はさすがに増えていて42％となり、「あまり」を加えると７割を超す。「悪いことが続いたら改名するといい」も同様だ。しかし、事象がどんなに科学的、または経験的に説明されても、ジンクスが全くなくなることはないだろう。人生に予測できない災難の可能性がある限り、身を守る手段の１つとしてジンクス

図22　ジンクスを信じるか



を活用する人々はなくならないに違いない。

ジンクスを信じているのも、女子に多い。「耳たぶがふっくらしていると金持ちになる」「悪いことが続いたら改名するといい」の2項目は、男子と女子の信じる割合がほぼ同じであるが、他の項目は8％から20％ほど女子の方が多く信じている（図23）。

しかし学年差をみると、ここでは、学年を追うにしたがって、ジンクスを信じている数値が下がっているわけでもない。ジンクスを信じる層というものは、年齢にはあまり影響を受けないのかもしれない（図24）。

図23　ジンクスを信じるか × 性

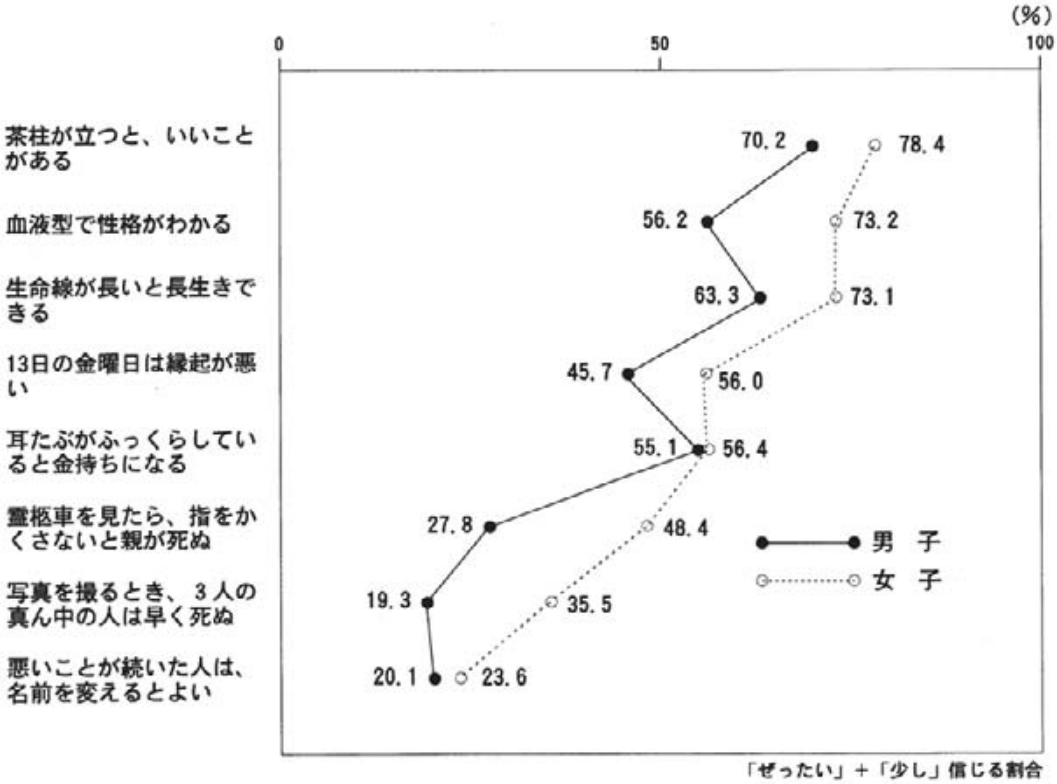
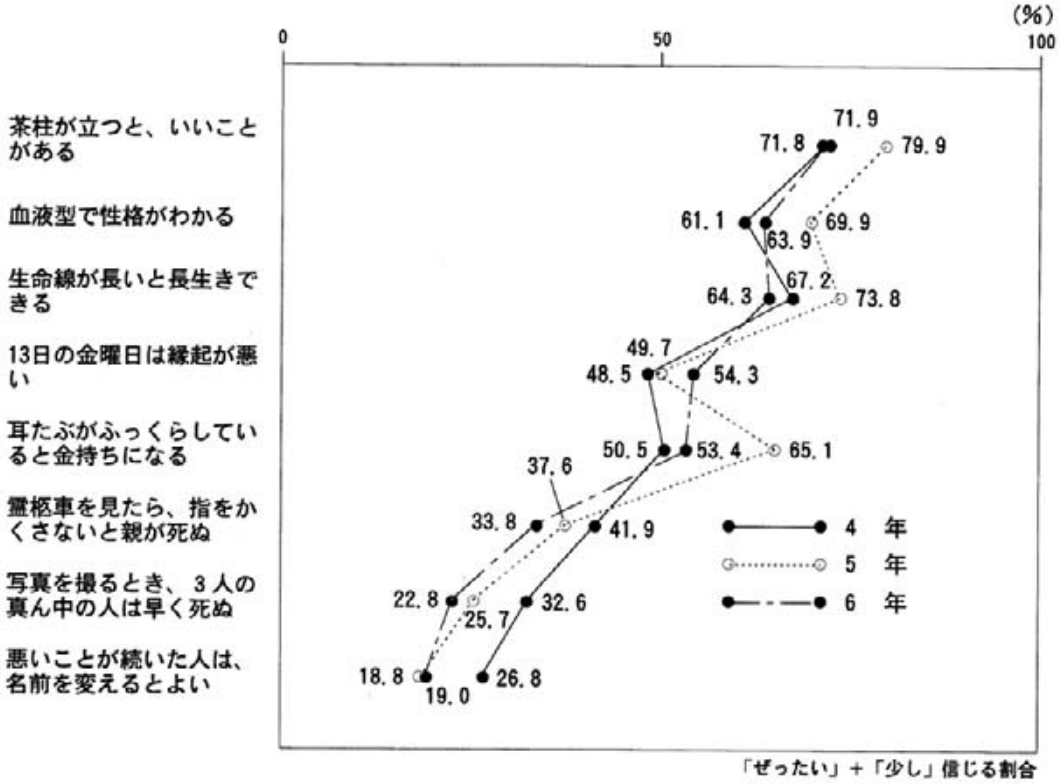


図24　ジンクスを信じるか × 学年



「ぜったい」＋「少し」信じる割合

●神仏を信じますか？)))

不安の解消の方法という意味では、ジンクスより宗教の方が大きい効果を持っている。最近は第４次新宗教ブームといわれるが、飽食の時代にあっての宗教のニューフェースは現世利益をうたわない。例えば、そこに登場するのは神や仏ではなく「霊」であり、神秘主義的な衣を纏うことで、人々の心を引きつける。

では、子どもは「神や仏」を信じているのだろうか。**図25**が示すように、子どもはもしかしたら、おとなより信心深いのかもしれない。神仏が「ぜったいいる」と答えた子は45％もおり、「もしかしたら、いるかもしれない」が48％と、合わせれば93％にものぼる。「いない」は７％にすぎない。ただし「いない」はやはり男子にやや多く、また学年と共に５％、７％、９％とやや否定率が増す。しかし強く否定する子は、６年生になっても１割にみたない（**図26**）。

では神仏に関連して「天国と地獄の有無」について聞いてみると、**図27**によれば、さすがに神仏よりは否定率が増して15％となるが、それでも「ぜったい・少し信じる」を合わせると６割を超している。そして、やはり天国と地獄を信じているのは女子にやや多く、また、学年が上がるにしたがい、「ぜったい・少し信じる」子が65％、64％、60％とやや減っている（**図28**）。

さらに関連した数字として、「神仏をバカにするとバチが当たる」かどうかを聞くと（**図29**）、83％の子どもが「ぜったい・少し」神仏のバチを信じている。むろんおとなの信仰とはレベルが違うものだろうが、ドライで合理主義といわれる現代っ子の中に、また違った側面をみる思いがする。

図25　神仏は本当にいると思うか

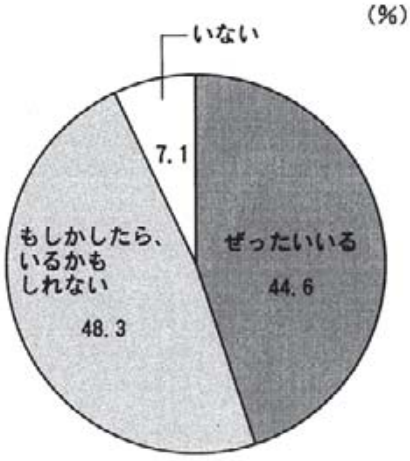


図26　神仏は本当にいると思うか × 性・学年

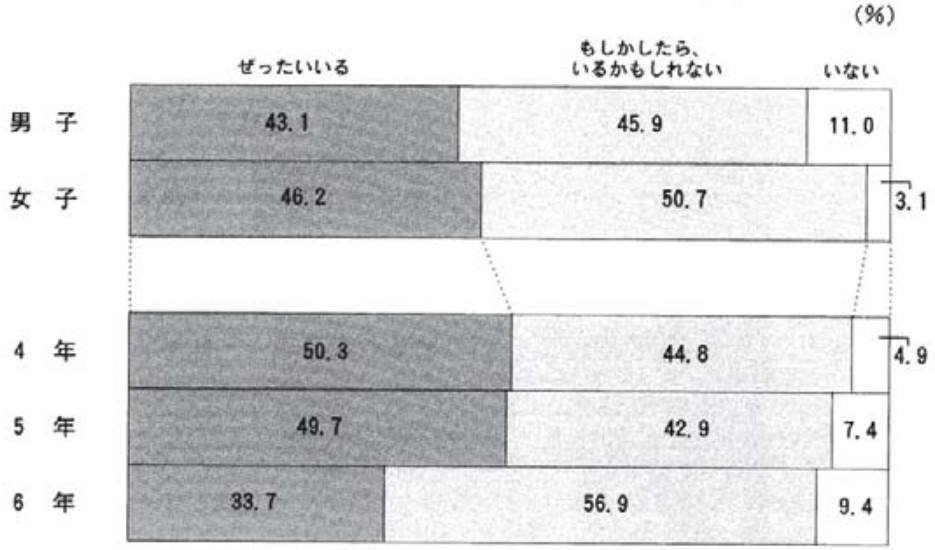


図27　天国と地獄を信じるか

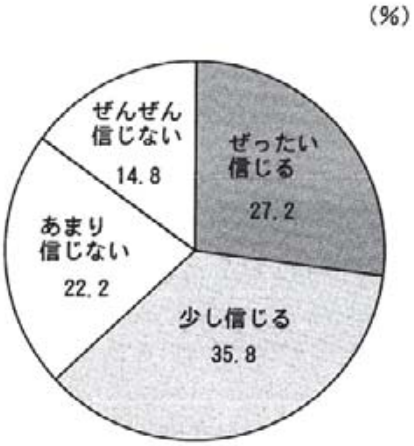


図28　天国と地獄を信じるか × 性・学年

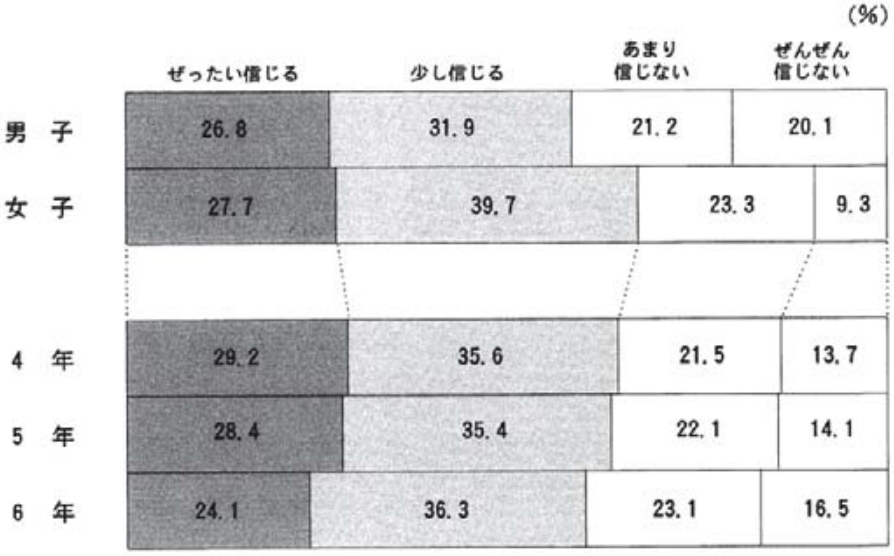
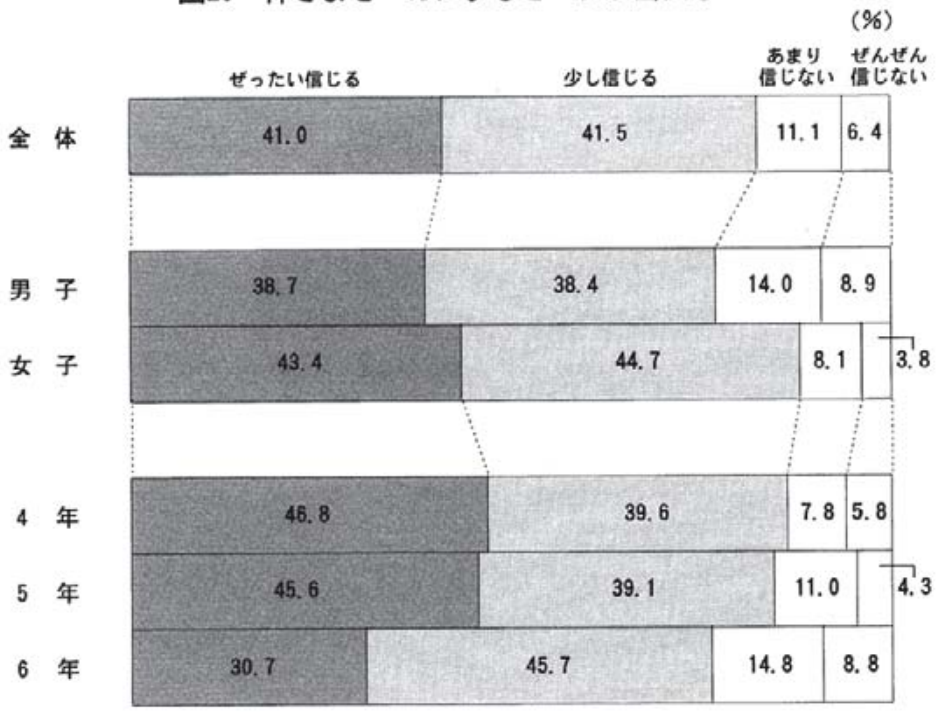


図29　神さまをバカにするとバチが当たる

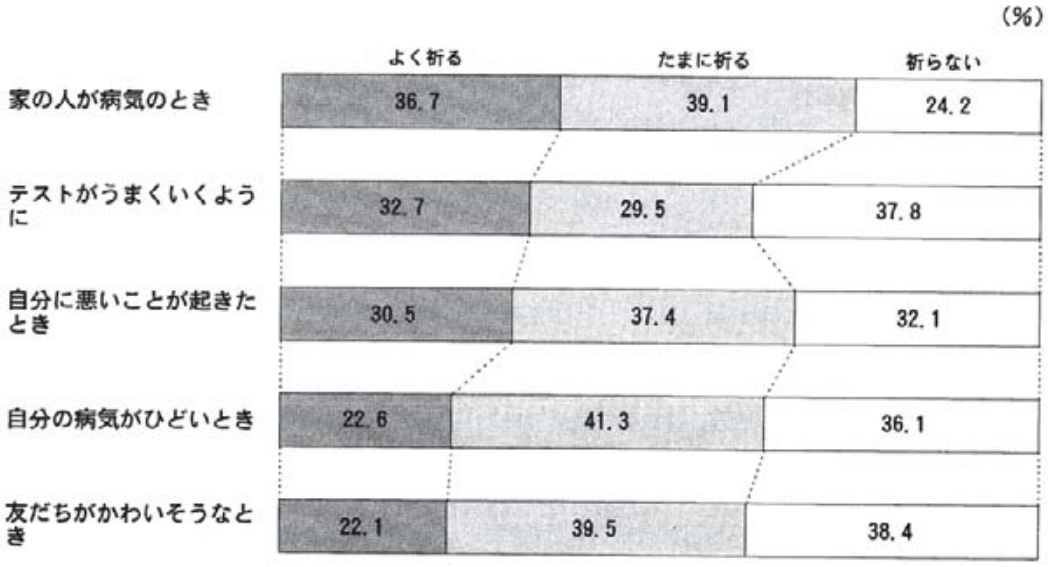


●祈りを考える)))

祈りとは何かを十分考察してみたい気もするが、ここでは脇におくとしよう。

日常の中で、自力で対応できない困難なことが起こったとき、子どもは祈るのだろうか。図30でみると、子どもはけっこう日常的に祈っている。どの項目も「全く祈らない」のは3分の1ぐらいでしかない。とくに「家の人が病気のとき」はよく祈っており、「よく祈る」が37%、「たまに祈る」も39%、合わせて76%もいる。次いで「テストがうまくいくようによく祈る」子が33%と2位である。この2つが、子どもにとって、いちばんこわいことなのかもしれない。

図30　神仏に祈るか



例によってここでも祈るのは女子で、「家人の病気」「テスト」を例にとれば、「よく・たまに祈る」子は、それぞれが男子69%、女子83%、さらに56%、69%である（**図31**）。むろん学年が進むにつれて祈る子は減っていき、例えば「テスト」では37%、34%、27%と減少している（**図32**）。

では祈りの効果はあるのだろうか。**図33**によれば、「祈って願いがかなった経験」では半数を超える子があるといっている。男子と女子ではここでも大差で、1度以上願いがかなったとする子は、男子45%、女子では62%となっている。

図31　神仏に祈るか × 性

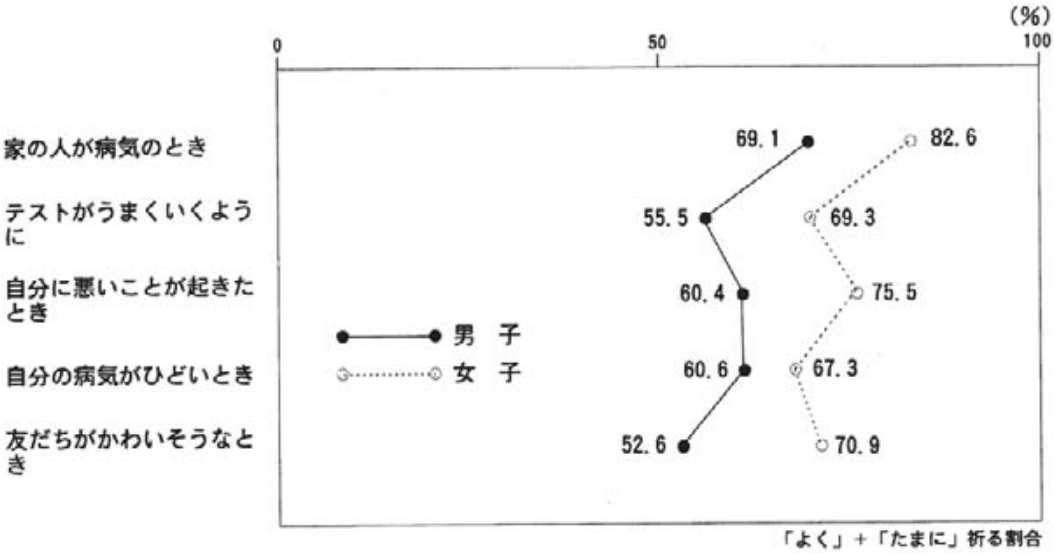


図32　神仏に祈るか × 学年

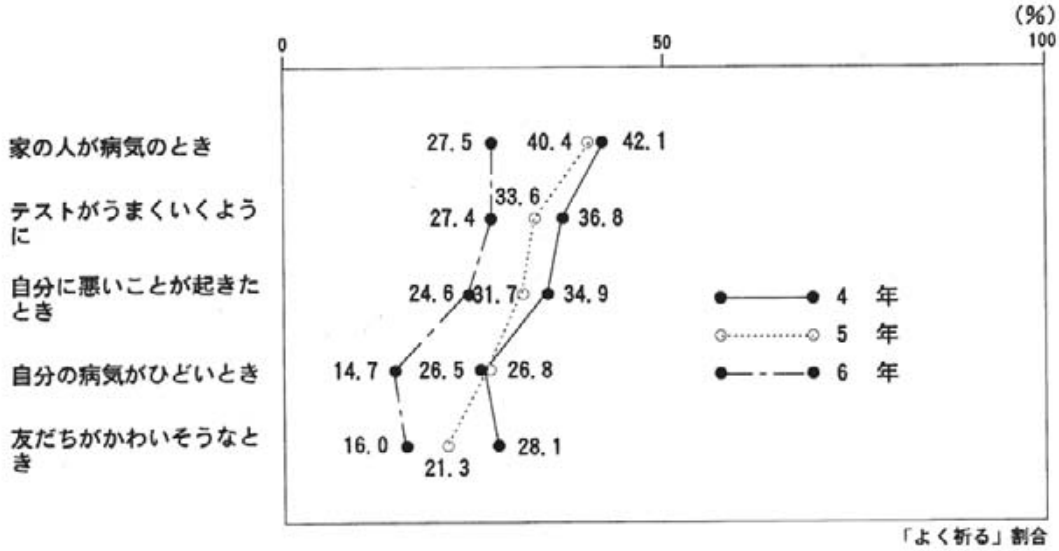
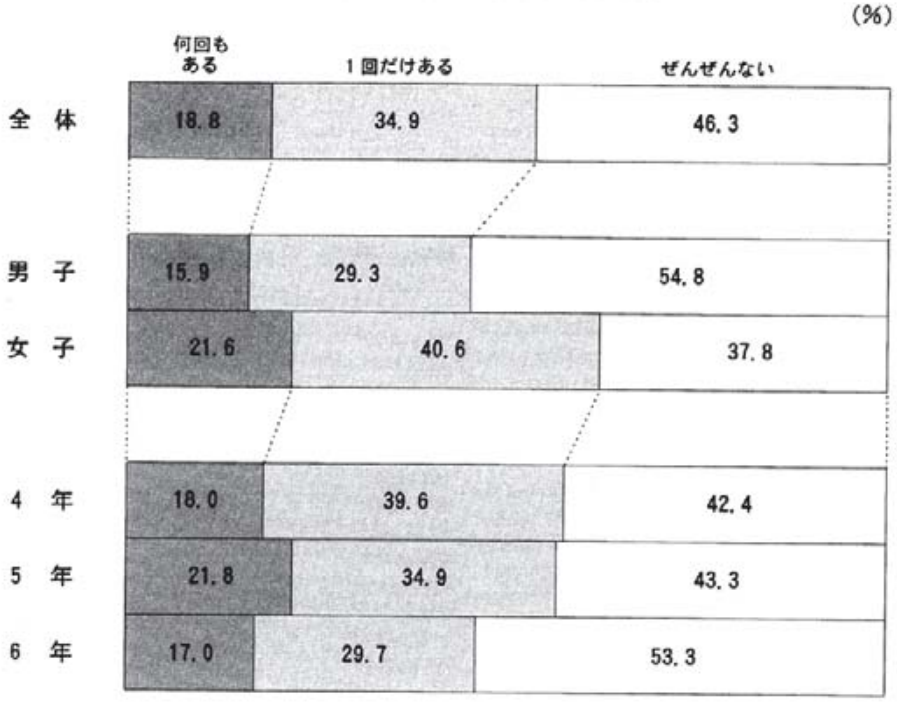


図33　祈りで願いがかなったこと



しかし願いがあっても、お寺や神社、教会へ行って拝んだことのある子は**図34**に示した通り半数近くで、図30でみたように日常的に祈っている割には、お寺や神社、教会へ出かけてまで祈る子は少ない。

つまり子どもの祈りは、宗教を信じてする祈りとは違って、個人的で内面的な願いが、子どもの一般的な祈りの姿なのだろう。

したがって、**図35**に示したように「おはらい、お参り、おさい銭」等の行動を「ぜったいききめがある」とする子は1～2割で、大部分は「あるかもしれない」と半信半疑でしかない。

では、このような神仏を信じる気持ちの背後にある家庭的な文化はどうか。**図36**に示したように、仏壇がある家は約3分の1しかな

図34　願いごとがあって寺社、教会へ行って拝んだこと

(%)

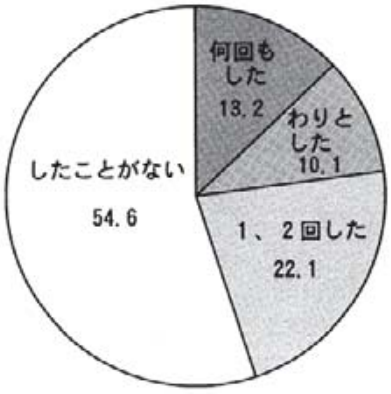
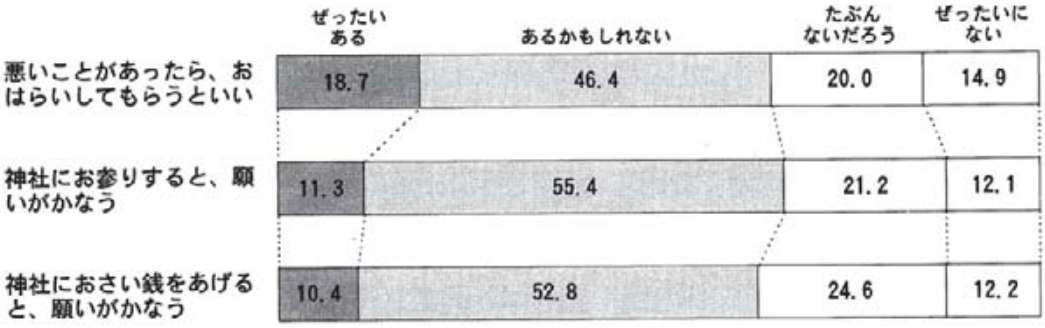


図35　本当にききめがあると思うか

(%)

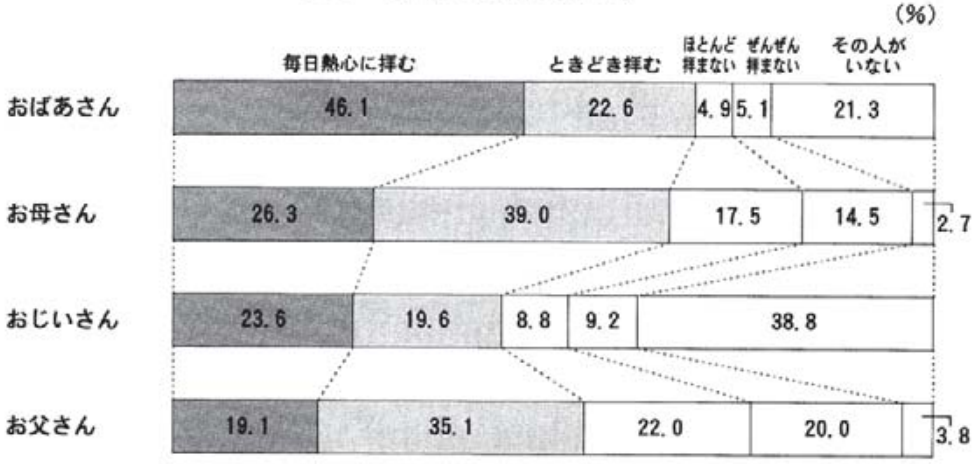


いし、あっても図37が示すように、「毎日熱心に拝む」のは祖母ぐらいのもの（46%）である。しかし祖母と同居している子は、巻末の集計表によれば、「以前同居していた」を含めても4割強でしかない。大部分は親たちが神仏を拝む姿をそう日常的に目にするわけではない。どうやら神仏を信じるといっても、それは教義として「信じる」わけではなく、おそらく彼岸にいる祖先、とくに身近な死者への呼びかけがその正体ではないかと思われる。

そこで、次に仏事としてのお墓参りをみてみよう。

図36　仏壇があるか

図37　家の人は毎日拝むか



●お墓参り)))

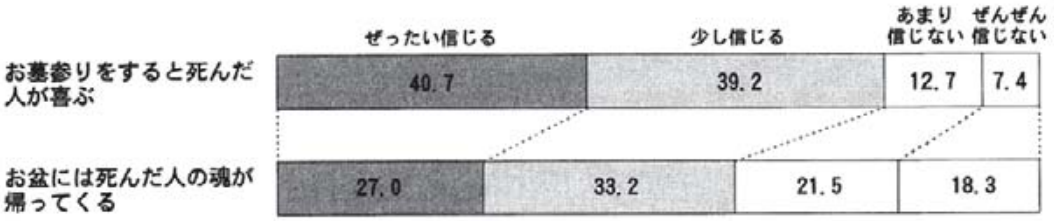
図38で「お彼岸やお盆に、家族そろってお墓参りに行くか」をみると、遠方の墓地もあるだろうに、「必ず行く」家が4割もあるし、「たいてい・たまに行く」までを合わせると85%と高い数値となる。仏壇はなくてもきちょうめんにお墓参りに出かけるのが、日本人の「死者とその魂」に対する信仰であろう。したがって、**図39**に示したように、子どもの多くは「お墓参りをすると死んだ人が喜ぶ」(「ぜったい」と「少し」を合わせて80%)と考えており、「お盆には死んだ人の魂が帰ってくる」(60%)とも信じている。

図38　お墓参りに行くか

(%)

図39　次のことを信じているか

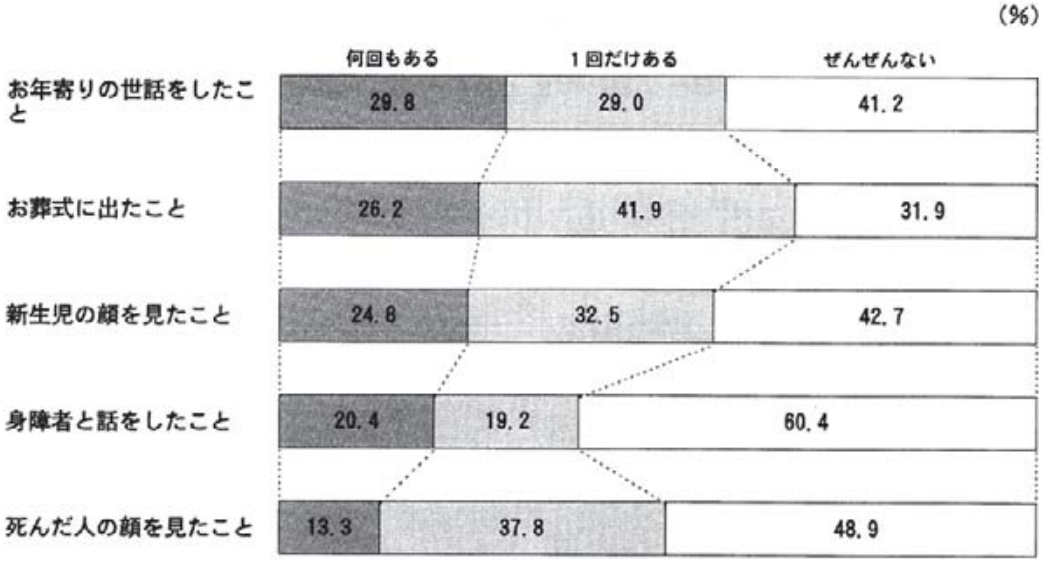
(%)



●生や死との出会い)))

宗教は、自然に対する畏怖心や、普通では理解できないできごとを体験する中で生まれたとされる。子どもにとってその機会とは、身近な人間の誕生や死を目のあたりにしたときではないだろうか。「生や死」に出会わなくなったとされる最近の子どもたちだが、念のために尋ねてみると、図40にあるように、半数くらいの子は1度くらいは生や死に出会っている。すなわち、葬式に出たこと、死んだ人の顔や、新生児を見たことがあると答えている。むろん1度くらいでそれが衝撃的にインプットされることはないであろうが、おそらくマスメディアを通して、その何十倍の疑似的な生や死に出会っていることを考えると、今の子どもたちに対して、一概に生や死を知らない世代とはいえないのではなかろうか。

図40　生と死の出会い



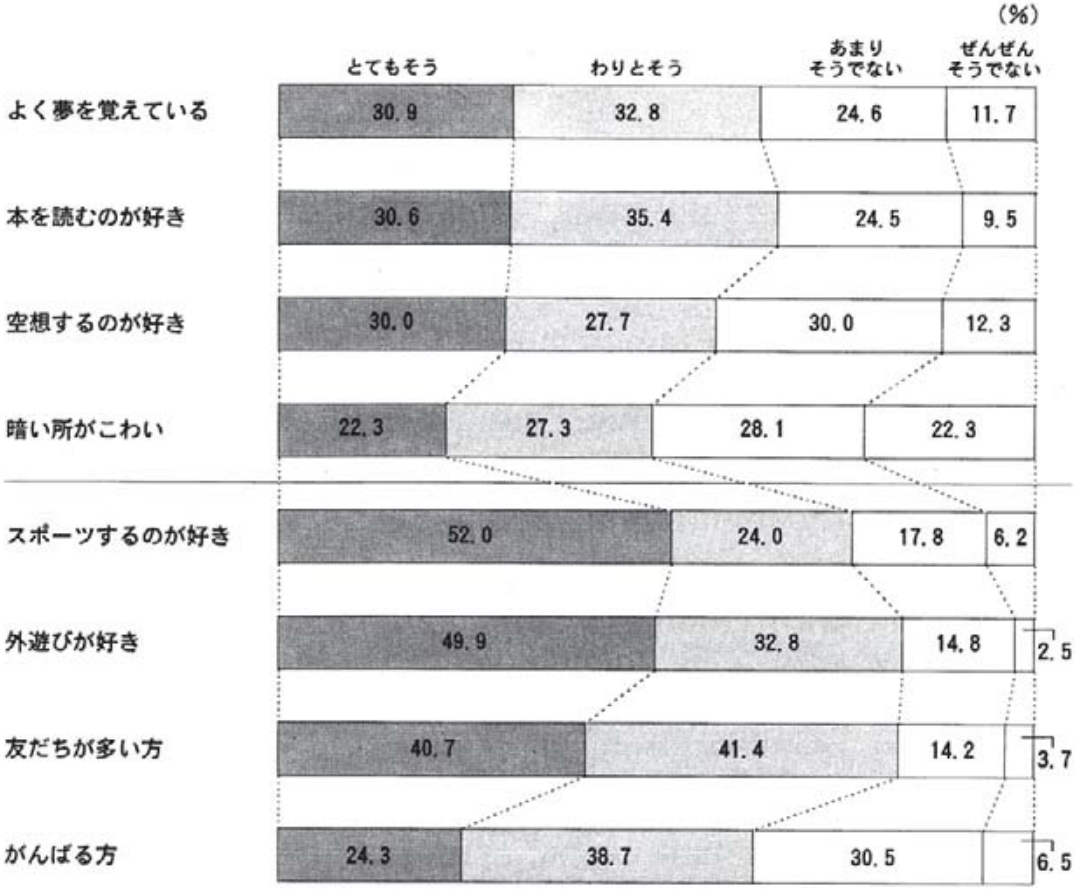
4 まとめ

今までみてきたように、科学万能時代に生を受けた現代の子どもたちも、異界や神秘的なもの、超自然的なものへの関心はかなり高く、そうした世界に親しんでいるといえそうだ。ちなみに図41に示したように、自己評価をさせてみると「よく夢を覚えている、本を読むのが好き、空想するのが好き、暗い所がこわい」と、昔ながらの子どもらしい特性もけっこう持っていることがわかる。

今までみてきた、科学で説明できない非現実的なことに対する子どもの親近性は、おとなのように切迫した予期不安に根ざすものではなく、（ユング心理学でいう）ウロボロスの世界からやってきたばかりという子ども特有の発達段階上の特質からのようにも思われる。むろん仕掛けられた情報にもたやすく影響され、あるいは家庭内の文化にも根ざす部分が多そうだが、こうしたものに子どもがひかれるのは、子どもらしい特性に加え、親子の密度の濃い関係から発した「亡き人々」への親たちの追憶が形作っているようにも思われる。

＊人間は母胎ではもちろん、子として誕生したときも全く意識はない。無意識だけが全体である。この状態がユング心理学のいう蛇が自分の頭で尾をくわえるUroborosで、それ自体全体である無意識から意識が流出する。

図41　あなたはどんな子か



最後に図42で子どもの幸せ感をみると、なぜか女の子の方が幸せで、また学年進行と共に幸せ感が低下していく。これは今までみてきた不思議なものへの関心と一致する傾向である。子どもが現実へ接近し、不思議なものや異界を信じなくなることが、おそらく子ども時代の終わりであり、また幸せ感を失う道筋とも一致している様子は切なくも思われる。

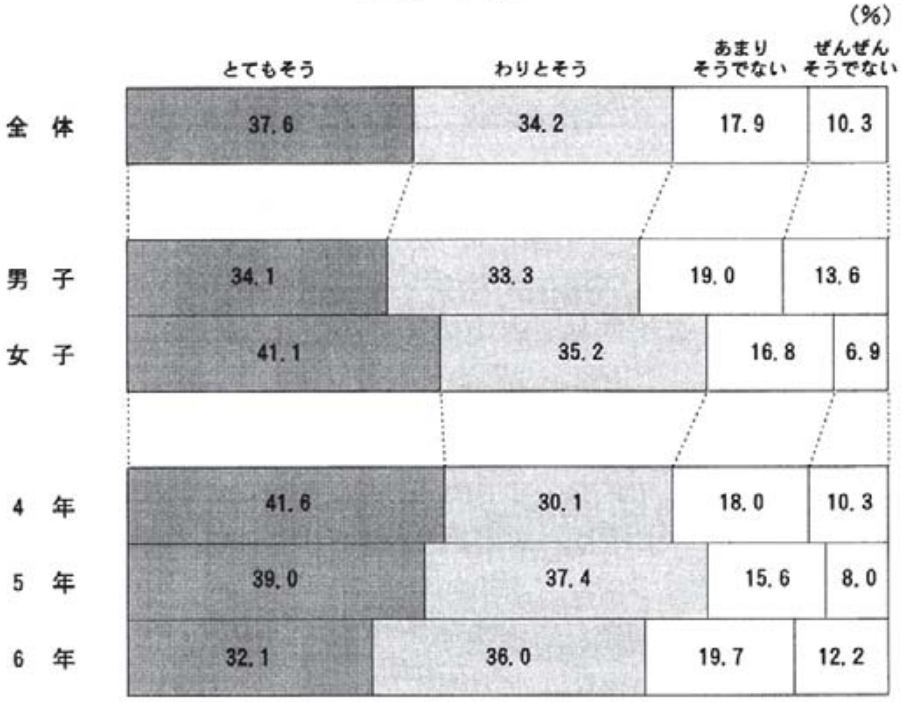



図42　幸せか